竹頭木屑録

昭和四年三月下浣起筆

三

特別
14
1919
411

176676

竹頼木屑錄

昭和四年三月下浣起筆

○三月廿三日印刷今治并出張部の同人は三十名と函嶺塔ヶ澤ヶ沢を試み、夜の間三坂峠宴会をひらき、校書帙河の魚を助くるあり、一行中蕎木十数門下の二ち家あり、書家あり、俳諧家あり、詩を樂しみ、樂しみ盡きて、一夜の興を深めるあり、酔餘の節を曳き、音の勝を節あり、俗なる神氣を爽するあり、皆各好む所と

38- 9197

将軍の最終の公式の行列であります公文書は此の行列に對しましての禮狀でありまして之も武門政治の最終の公文書であります。

一古金銀と金札

關所存在當時に使用せし我國の昔の貨幣と紙幣とであります。

一日光御社參諸大名行列割

一騎馬百騎一巻

各大名の馬上公式の順席であります。

一御東幸觸書

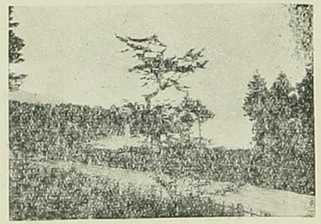
明治大帝御遷都につき御通過に就ての注意書であります。

一朝鮮國王と五代將軍との往復文章

此等古文書も皆關所にありましたもので御座いました

任かせて、吾人は多衆と團まんで碎縦
談、時の移るを知らず、聽きも共に倦まさるに似たり、
技宿の旅館は常設の環翠樓あり、嘗つて大
隈伯後援會々長として總選擧に戦ひし事
終つて数日の後に静養せしことあり、震災後
改造して面目一新す、此家多く伊藤春畝侯の
書を藏す、余の室にも公の扁額を掲く、文云、
半窓碎水落珠璣と、蓋し寔意外に流あり
目前の景を叙したる也、函嶺震災の為め山
容水態を變し風致を損ふこと少からず、去
九月之れを檢査し、此の家の庭園と静寛院
和宮の紀念碑あり、碎後之れを観る、委曲

榛原製



今の關所

箱根關所

箱根の關は元和四年の春今を去る事三百餘年前德川氏の初めに設けられたもので、德川氏は內亂た防ぐ方法として大名の家族を江戶の下屋敷に居住せしめ之等の家族の西の方へ行く事と西の方より江戶へ行く武器の通過を嚴重に取締つたのでありますが何日頃の事か百姓町人にまで及ぼす事となりました。之が德川氏の政策で十五代も繼いた譯であります。今日此等の古文章を見ますれば如何に聖代のありがたさを感ぜずには居られません、弊館の祖先は德川氏の命を受けまして關所建設と同時に此地に本陣職となりまして、本陣は職名でありました）十有四代に及びました。明治二年に關所は廢されまして、其際に關所の遺物其他一切弊館に藏むる處となりました偶內務省の史蹟保存會及各新聞社の勸誘によりまして、今回三百年間の關所の遺物と本陣の遺墨との假の考古館を設けまして、一般に閲覽を願ひ永久に此歷史を保存いたしたいと思ひます。幸に高覽の榮を賜らば本懷の至りに存じます。

舊東海道五十三次ノ內
箱根町芦之湖畔（舊箱根驛）
箱根關所考古館
電話箱根五番

箱根町芦の湖畔
箱根ホテル
電話箱根三六

皇太后陛下の臺覽を賜りたる

關所遺物陳列目錄

一大名、士、百姓、町人の印鑑　大名、士、外百姓町人は幕府の指名によりまして關所通行手形を書く事が出來ましたあらかじめ一所に各々の印鑑を屆出して置ます關所にては之を見合はせ印鑑と申します。大名は朱印を用ひ其他は黑印を用ひたのでありま。

一大名の手形と士、百姓、町人の手形、往復手形　大名の手形は芳草紙四ツ切りを定めとして士、百姓、町人はハジキラズ全紙を以て定めとして御座居まして、文意も異つて居りました。手形を書く事の出來ますものは大名では家老職、百姓は名主、町人は家主でありました。

一明治大帝陛下御用印　明治大帝陛下の都を江戶に遷されました。慶應四年矢張り關所へ御下げになつた御用印であります。食券、馬銅券も其當時宿驛に使用されたるものでありまして明治天皇御事蹟の一の紀念となつて居ります。

一五十三次代官の印鑑　大津より品川、江戶宿までの代官の見合せ印鑑は別に式が異つて居りました。

一多人數手形、印鑑引合せ證、荷物手形　大名行列の際使用された手形であります。

一馬の手形　馬にも手形が入りました。馬を扱ひますものは昔は馬と同樣にされまして馬と同一の手形でありました。

一女通行證文相違覺　關所の定書にあります通り女は江戶より西の方へ行くのが嚴重で女の手形は人相書同樣でありました。關所には老婆を雇つてありました。女に限りこの老婆が頭の毛の中から足の先まで調べました。賄物の跡三ツと證文に有つて實際は四ツあつた時は通れぬのであります。

一箱根の關繪圖　關所あとを見ますと湖水側に松が一本あります其側に今でも廣石が殘つて居りますが之に番所が建てられてありまして正面に座つて見張りますが番頭と申し兩側に控へてをりますのが横目役と平士と申します旅行の手形を受取りまして、横目に渡す役は下になります。足軽の勤めであります。

一關所定書　正德元年の定書が今殘つてをります。關所のあとに松が一本あります之を見返りの松と申します坂の下に高札があつたのであります。

一關所覺書　關所の要害山の事や關所にかゝわる一切の事が書いてあります。箱根町人が舟で薪を採りにゆくにも每朝關所に舟をつけまして板子の下まで調べて貰ひ、許を得て出かけます。歸りには又々關所によりまして板子の下は又々關所にとりまして板子の下

昔の關所

身を孤獨賴るなき一浪客より起して、徒手關八州を創定したる、早雲公は其先平氏に出で、本姓を北條諱を長氏と云ふ、桓武天皇の後裔北條時故の遠孫行長の子なり晩年薙髮して早雲と號す、高曾祖時行足利氏の爲めに鎌倉に敗られ船に乘じて京師に歸り、再擧を計らんと欲して、途に暴風に遭ひ、僅かに身を以つて伊勢の海濱に漂着し、爲めに多くの士卒を失へるを以つて、暫らく同國に流寓し、機を見時を察して、大に爲すあらんと欲して果たさず空しく志を抱いて逝く、公乃ち祖父の遺志を繼ぎ、竊かに回復の企圖を有し、寤寐に之れを措くこと能はず、因つて深く自から韜晦し常に外戚の伊勢氏を冒し、自から伊勢新九郎と稱し、天下尚軍事に精しき者有らば習練せんと欲し諸州を歷遊して弘く英傑の士に交る偶々備州吉備神宮に詣り、禱ること七夜、夢に神靈劍を賜つて曰く、是れ汝が成功の靈器なりと、公覺めて後大に喜び、歸途果して一古劍を得て以つて寶となす、長氏曾て京師に在る時、一日儒士をして三略を講せしむ、儒士の曰く主將の法は、務めて英雄の心を攬るに在りと、公之れを聽て曰く止めよ我れ已に了せりと、復講せしめず、又時の名僧、龍峰山大德寺宗清藏主と相識るや深し、宗清も亦公の奇表あるを知り、厚く之れを遇す（宗清後に以天和尙と號す）長享元年孤劍飄然京を出で、駿州に赴かんと欲して宗清に辭す、宗清詩を以つて之れを送る、云ふ欲し途に功名一出帝畿一預知塞外振全威一君他日復東海地一分我一簑烟雨磯と、長氏大に悅ひ途に師贄の義を約して去る、夫より駿州に赴き今川氏親に寄寓す、氏親の母は公の姉たるに依り、氏親殊に厚く公を遇し公も亦氏親を助けて數戰功あり後高國寺の城に居らしむ、公常に下民を愛撫し窮士に施賑す故に遠近悅服する者甚だ多く、聲望日に益々高し、當時足利茶々丸横恣日に益々甚だしく土下之を苦しむ、公義兵を擧げて堀越に討滅し、夫より連戰連勝、竟に豆州を統一して韮山城に居る、明應四年小田原を攻め一擧して之れを拔く、是に於て勢威赫々日に隆に月に熾んにして近傍の諸城風を望んで降服し、八州の豪傑悉く下風に俯し茲に漸く始めて五代の基礎を創建するを得て、永正十六年八月竟に薨せり、繼いて子氏綱孫氏康亦能く祖業を繼承して、覇業輩乎として完成するに至る、曩に公の宗清と相識るや、心に之れを大器なりとして贄執の義を約し後志業成るに及んで、常に宗清の爲めに梵刹を建つるの意あり、然るに當時戰亂猶未だ止まざるを以つて果さず、依つて薨ずるに臨んで、特に氏綱に遺命するに其の事を以てす、氏綱即ち一寺を建立し、宗清以天和尙を聘して開山となし以つて遺命を全ふせり、尋いで、後奈良天皇の勅願寺となる、實に今の早雲寺是なり、寺に即ち五代の墳塋肖像及遺物數十種を存す、今茲に公の肖像を縮寫して、世に公にし弘く其の風采の眞を知らしめん、以つて史料の一助となさんと欲す、世人其の眼光烱々人を射るの威容、英氣凜々風を生するの偉貌を一見せば、直ちに其の稀世の大英傑たるを知るを得べし而して此圖國寶に編入せらる蓋し又皇外の榮なりと謂ふべし。

北條早雲公略傳

まで調べて家に歸ります之は關所破りが舟の下などになりはせぬかとゆふ調べであります。此等の事は凡て本書に明記されてあります。

一鬼門除けの圖　關所役人の詰所正面の上部に掲げありしものと申します。

一箱根權現に關する代官の申渡書

一關所通過に關する各大名の古文書

一槍並に袖カラミ　關所存在當時に使用されたる備への武器でありました。

一箱根八里の繪圖　徳川氏學問所御勘番の編み出しましたもので箱根關（今の箱根町　の中央より西は皆、江川太郎左衛門代官所の領分で中央より東は全部小田原城主大久保安藝守の領分でありました。關所の平面圖は此の箱根八里の内に御座居ます。

一長持、旗印　各大名の參勤交代の時往來します長持ほとなたも柳存じの雲助が長持歌でかついたものでありました。其長持うにつけました旗印であります此の旗の大小によりまして大名の格式が判るのであります。

一關　札　大名が箱根驛（今の箱根町）に宿泊又は休みます時には何々の守と書かれたる札が關所と本陣と驛の入口に建てます之の札を關札と申します之も大小によりまして其格式が判りました。最も古いものでは徳川氏初代頃の本多平八郎で其次ぎは赤穂城受取役脇坂淡路守尾張大納言で最近のほ井伊掃部頭水戸御老中武田耕雲齋、林大學頭等であります。

一定飛脚鑑札　此は手形がなくとも飛脚は幕府から下げられた鑑札で往來したのであります今は只一枚殘つて居ります。

一早飛脚鑑札　尾張大納言の早飛脚の合鑑で手形を書いてゐるひまのない時に用ひた鑑札であります。

一陣　笠　大名行列の時使用されたものであります。

一上洛の繪圖と公文書　文久三年將軍が西方へ向ふ時日本全國の大名を集め一時に御供をさせた徳川將軍の最終の公式の行列であります公文書は此の行列に對しましての禮狀でありまして之も武門政治の最終の公文書であります。

一古金銀と金札　關所存在當時に使用せし我國の昔の貨幣と紙幣とであります。

一日光御社參諸大名行列割

一騎馬百騎一卷　各大名の馬上公式の順席であります。

一御東幸矚書　明治大帝御遷都につき御通過に就ての注意書であります。

一朝鮮國王と五代將軍との往復文章　此等古文書も皆關所にありましたもので御座います。

一明治大帝御遷都に關する諸記錄

一箱根戰爭人名簿

一舊　記　錄　（關所設置の事等）

一關所廢止の記錄

一大政官高札　其他略します

本　陣

一大石内蔵之助東下り　元祿年間東へ下りし時の宿泊簿で島目三貫文但し風呂代共と書いてあります。

一大石頼母　大石内蔵之助の養父でありまして數回宿泊して居ります。

一大石外衛　大石内蔵之助の孫でありまして淺野内匠頭本家藝州公へ御呼び出しになつた時のであります

一山鹿甚五左衛門（素行）護送の事　大石内蔵之助十六歳の時主君の大命を帶びて箱根越へか決行致しました大石一代の内三大業の一であります。

帳簿には淺野内匠頭預り人下りとしてあります。

一柳原大納言一行の宿泊　天皇の御つかひで江戸の將軍家へゆかれます時の宿泊記錄でありまして此時將軍家には御勅使に對しまて饗應役が淺野内匠頭でありました歴中の事件ほ之がもとになります柳原大納言の歸りも宿泊して居ります。

一脇坂淡路守赤穂城受取の爲め宿泊　元祿十四年四月一日城受取として通過の際宿泊されたもので外に目附役荒木十左衛門の一名も宿泊して居ります。

一本陣の圖　大名行列當時使用された本陣の間取圖であります。

一古狸の書　古狸鎌倉建長寺住職を殺し同住職に化け京都に上る途中伊勢路に於て名犬の爲めに殺されました。箱根通行の際本陣に宿泊して書かれたものでありまして箱根不思議の一になつて居ります。

「其他略します」

一明治大帝御遷都に關する諸記錄
一箱根戰爭人名簿
一舊　記　錄　（關所設置の事等）
一關所廢止の記錄
一大政官高札　其他略します

本　陣

一大石內藏之助東下り　元祿年間東へ下りし時の宿泊簿で鳥目二貫文但し風呂代共と書いてあります。
一大石賴母　大石內藏之助の養父でありまして數回宿泊して居ります。
一大石外衛　大石內藏之助の孫であります淺野內匠頭本家藝州公へ御呼び出しになつた時のであります
一山鹿甚五左衛門（素行）護送の事　大石內藏之助十六歲の時主君の大命を帶びて箱根越へ決行致しました大石一代の內三大業の一であります。
帳簿には淺野內匠頭預り人下りとしてあります。
一柳原大納言一行の宿泊　天皇の御つかひで江戶の將軍家へゆかんます時の宿泊記錄でありまして此時將軍家には御勅使に對します饗應役が淺野內匠頭でありました殿中の事件は之がもとになります柳原大納言の歸りも宿泊して居ります。
一脇坂淡路守赤穗城受取の爲め宿泊　元祿十四年四月一日城受取として通過の際宿泊されたもので外に目附役荒木十左衛門の一名も宿泊して居ります。
一本陣の圖　大名行列當時使用された本陣の間取圖であります。
一古狸の書　古狸鎌倉建長寺住職を殺し同住職に化け京都に上る途中伊勢路に於て名夫の爲めに殺されました。箱根通行の際本陣に宿泊して書かれたものでありまして箱根不思議の一になつて居ります。
「其他略します」

昭和十五年一月國學院にありましたもので御座います。

の事蹟を錄す、實に養子の身を以て此家を治め、此家を
ることあるまで、余へ此の女傑の夫人爲めにしこと
を思へば感慨之れを久うす。早雲寺を訪ふと
雖も、之れを行く、初めて北條五代の墳墓
を拜す、寺に今寶什を觀、宗祇と北寺の關
係を質し、又祇空の事を聽く、此人紀伊
國文左の巷に住すと雖も家祇と和歌に巧みなりとす。
散策中函根細工を見さる家を訪ひて玩具を
購ふ、余僅かに折鶴を七巧式に作りたるものを購
ひ、之れ從來無見さる所近日の產と爲す、余一
行と共に云く、此の義術外人の到底企及
ハさる所のものと、驚く恐くは之れを玩弄し架に置

き地の清水」の記念とす

○余前の書冊の即麦舟中江兆民の手稿一冊を獲、後三日又手沢の稿を理学の鈎玄二冊を獲、余何んぞ多かく兆民に忠なるや、余兆民と深交なり、僅に一回大限先生の家に同坐したることあるのみ、但此夜の少時如人と兆民の文を読むのみ、其の筆改を受す、理学鈎玄三篇人性論河海論等の稿の数件を得のみ、賜の築中の置くあり

○新潟の酒楊行形亭鈎茶屋推し翹楚と為す、而して楊名雅を欠く、蓑谷一六等なり

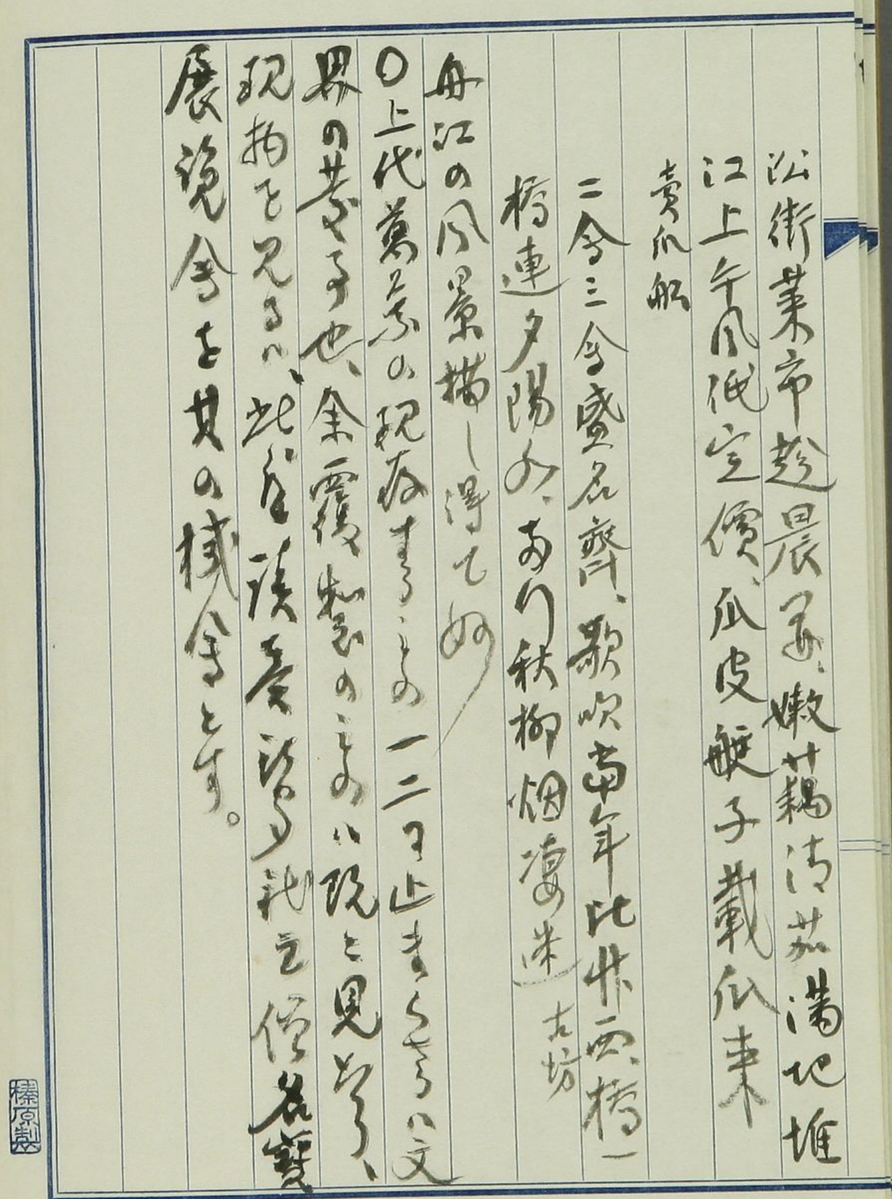
日前万一游戯也、之を命じ後者に那を差定し、と命じ後那を南と改め、他と石埭の新潟尋句回詩を閲するに、二友五峯一瓢徒の句に、二人の游戯也と、客まるの移あり、云く

舞蹈蹌又唱玲瓏、高会山亭酒不乏、
畢竟人生游戯也、百年須送一杯盃

中

石埭の詩十八首中加古左の二句を愛す、今併せ録す

信濃川の秋潮、隅山岸楊を一瞥金平板登に行る者人道楊上北志楊



―古筆―

▼**御物**桂本萬葉集　萬葉集の原本並に本文成立當時に近いものは、今、一も世に傳はらない。僅に平安朝時代の書寫として、此桂本を始め藍紙本、金澤本、天治本、元暦校本の五種ありの筆と傳へらるゝが準據なく、當時の能書家の筆になるものであるとだけは判る。筆跡のめでたさ、料紙の美しさより見ても殊に尊いが、學問上から見ても校勘の資料として價値が多い。元、加賀の前田家から八條宮（のち桂宮）にさゝげ、明治に至つて帝室の御物となつたので、略して桂萬葉と云ふ。表紙の書（室町時代）題簽（徳川初期）は後世のもので、縦八寸八分五厘、長さ大略一尺六寸六分の八色の繼色紙十六張である。

▼**御物**金澤本萬葉　現存せる萬葉集古寫本五種の一である。元加賀前田家にあつたが、明治四十三年、明治天皇前田邸に行幸の折、献上して爾來御物となつた。收むるところは萬葉集巻二の大部分（五十八枚）と巻四の小部分（二十枚）との零巻を一帖にしたもので、古くは源俊頼の筆と傳へられてゐたが、先年、田中親美氏の説に藤原定信と鑑せられた。料紙はから紙又はか

▼藍紙本萬葉集　平安朝の書寫本五種の一として稀世の珍とせられてゐる。料紙は銀砂子を疎らに散らした薄藍漉紙を用ひたので藍紙本の名がある。筆者は古來藤原公任と傳へられ、現存するものは卷の九の大部分及び十八の卷の斷片數葉であるが、原家藏の分は、第九卷の大部分で行數實に三百六十九行と同卷二百四十九行とに及んでゐる。

▼元暦校本萬葉集　萬葉集古寫本五種の一であり、古河家藏に係るものは十四冊、千五百六十四頁である。卷の二十の終りに右近衛權少將が、元暦元年六月九日校合したと云ふ奥書があるので此の名稱がある。併し書寫は其年に成つたものでなく、遠く其七八十年前の鳥羽帝元永前後に書かれたと云はれてゐる。此萬葉集は元、伊勢松坂の富豪中川常宇の有で、常宇が京師の公卿歌人清水谷權大納言に學んでゐたので當時公卿から求めたとも云はれ、一説に伊勢の國士北畠家から出たとも傳へらる、中頃伊勢射和の富山氏に移り、眞淵や宣長に知られ、千蔭の「萬葉集略解」の校本となり、更に攝津の廻船問屋俵屋の手に歸し、白河樂翁も之を書寫した。天保年間江戸の學者屋代弘賢が此集の賣物に出たことを傳へ知つて時の老中水野忠邦に勸めて其有となり爾來水野家の筐底深く埋れてゐたのを佐々木博士が發見して再世に出で今の古河家に入つた。

山脚文晁大幅

○中央公論に載せられた高田塚内と余三人対談せし漫話会を開く事となり、高田と共に三月三十一日塚内を訪ひ、三人共に一時を過ぬ間、この時に口を出位七の漫談を試む。高田文部書記を拝任す、北の漫談に別に数を定めず、先つ三人共に時代相違に拘はらず、この道懐旧談を如何、高田の軍隊生活、塚内の副官、明治以後の画家殊に橋本雅邦のこと、父地の風景談などが面白き話題であった。偶然の談話に高田の話は出る、旅行のこと、外国の話は税関の話、七時過ぎ遠慮なく帰る、自分も出る

於伝えのるも切なるものあるも、何となく氣がさしてもお
もしろく行かぬ、勿論連載記事を書く譯でもなく
かく業者の働きを、ふ〻掛捌まん心一下(ヒ)ら淡の
るものを取るも知れぬが、流石にそれ迄は
そうつれ。

○自分の十年時の経歴は報知社の新聞と
十一回連載されたが、大体の助力は
如記者と自分から流したと見えて外三者が書い
た体とそうもある、其の切り抜は前巻の終りに
掲げてあるが、報知社は新聞社の支社員に命じ
て私が流したといふのの事実を探らうとして記事
を取らしたりしたのは自分

り書のとする事も収めてある、十年時代の文
章はどこかに残つてゐるとは思ふが、見が花文化
とか、私が友人と共に政党を
論じた書簡とか、何とか取られた
とか、全く言ふまでもない記事する者
さへの(ゆう)間者)(つとらるかよくも)
跡を探つて回すとしてか私を張
め出きてくすくやうな氣がした

○洋行中の友人雄が内閣に出るとそれ外
国公使を歴訪したが、やはりフローレンス米の
烟草屋に金巻を吸ふ義務のものがあるから私
の宴を張れとのハカ名刺と豆しこ(ま)する

既々であつた。河筋の舞踊、ストラヴィンスキーの、アウテン作の沙翁夫妻あの小屋二個などは久しく欲しいものと思つたものであつた。河筋の人アンテ、ハサウエーの生家のコッテージを囲む垣根の厚皿、これは較べ形が大きくお茶棚になる。しかの木彫の鳩一個、これはチェッツ、スロバッキの産、地図のようなものを掲げた。無いからとて共の物を掲げた。

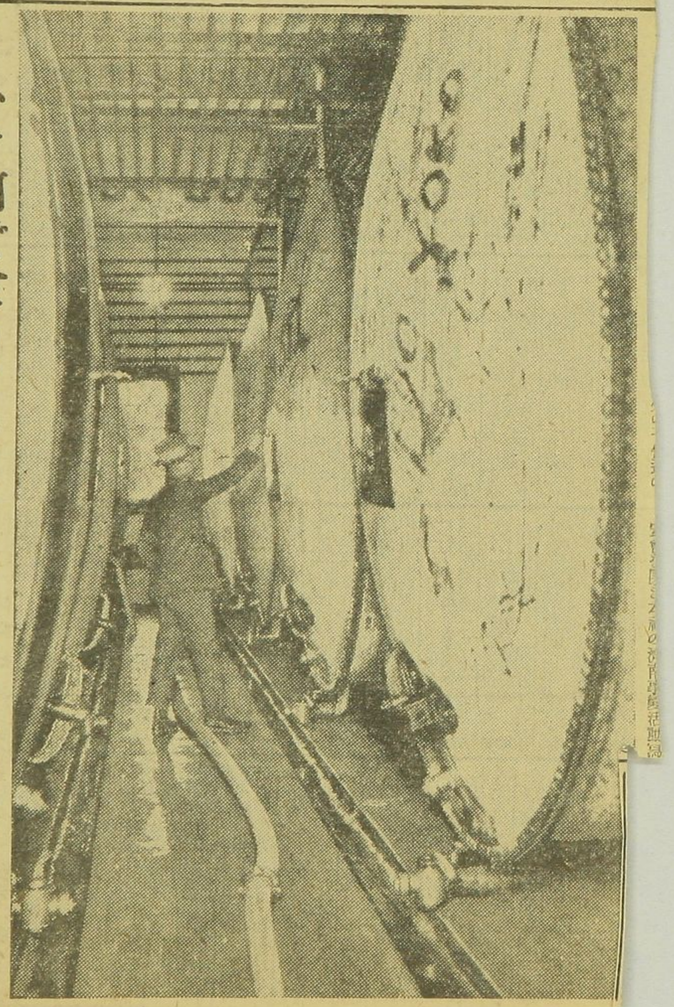
○熱海（ほのぼの）島の今宵は折、「良寛」の話が出た。日蓮島の方は良寛が村童の打手なる手毬を弄する姿へと自分は歌と歌とを思ひ、良寛の顔のやうな面白の顔の物語へ動かめへるのから、あれやらせる積りも先つ音楽ご流しの上で、早稲田の大隈公爵に演ずるなど云ふ話、その行ひ中央公論に投ずるなど自分の所用の名僧であるから自分も此の踊りは興味がある。

○坂口五峰の遺子先生の紀念碑を出版せんとして余に追憶談を求む。余は五峰の印刷、五峰書房の記、北城術記の文あり。坂口氏の紀念碑に登録の論文、北等に重複せる遺事を集し来行こと十数を作る、其の内容左のごし

一遺稿編集

一墨ヶ江書簡

一五峰の詩文を集録すること



ハテ何でせう？　新カスケードビールの一萬石大樽【川崎工場にて】

既報であつた沖縄の舊型、ストラウドフォードアウチン作の沖縄夫婦の小屋二個をハ入しく新しいものと思つたらうが、之れを見られの幸せあつた。沖縄名人アンチ、ハザウエーの生家のコッテージを囲むと沖縄の灰皿、こんハ較べ形が大きくお茶櫃（ちゃびつ）しるの木彫の鳩一個、これハチェッスロバキアの産、此皿の、あいまに第中ハ無いからを入れて其の粉を多げた。

○真珠（ほうしゅ）島の今しも折、良寛の話が出た。日蓮島のそのハ良寛が村童の打手ハ手毬を乗せる事の自分改に帰とうとの、良寛の顔のやうな面白の顔の物語ハ嘉永

一余の著編を六物庵と名づけること并に
庵記
一柏ぬ亭の苦茶羽の席号を始めること
一加流川氏利川氏調停のこと
一五峯の也に就て并に日出谷公園碑の
遺文を余が代書したること
一五峯の性格に就て
一五峯の書に就て
一余に心待をすゝめられること

英國上流社會の日本金工品嗜味

桑原羊次郎

予は本紙の二月號に於て、日本裝劍金工品が如何に多くの歐米人に鑑賞せられつゝあるか、又た如何に著名なる歐米博物館が之を蒐集しつゝあるかを說述した。此の機會に於て、歐米上流社會の日常の談片にも、既に日本裝劍具がのぼりつゝある好例を讀者に示さんと思ふ、殊に況んや此事件が日本內地に於て起りたるに於ておや、又た歐米上流社會中の最も上流社會に於て此事柄が起りたるに於ておや。

少しく舊聞ではあるが、後に錦雞間祇候貴族院議員で終つた、千頭淸臣氏が鹿兒島縣知事時代の事であるが、予が神戶諏訪山西常盤の隱宅を借りて僑居せし際、一日時の兵庫縣書記官永井環君より電話がかゝつて、時の鹿兒島縣知事千頭氏が本日午後君の宅を訪問したい故に在宅して吳れとの事であつた故に、千頭氏の來訪を待つて居た所が、午后果して千頭氏が來訪せられて、同氏は實は少しく面倒なる事を賴みに來た故との事であつた。其處で能々其樣子を聽くと、其前年末かに、英國のコンノート親王殿下が鹿兒島に漫遊せられし事があつて、其隨員はキチナー元帥や英國大使マクドナルド氏やであつた。處が、コンノート殿下の一行は西鄕南洲の墓所とか、東鄕大將の生宅なぞ見物の末、宿所に於て晩餐會の席上、何にかの事から、英國大使は千頭知事に對して曰く、歐米に於ては日本裝飾小道具を日本古代美術品の粹なるものとして、又た日本魂たる刀劍の裝劍品として、歷代の彫金工が渾身の努力を以て造り上げたる記念物として硏究して居るに依つて、大使自身も非常に此金工品に嗜味を有して居るが、恰度薩摩に來たりし事故、薩摩の金工小田氏や知識氏の系統と作品を取調べ、若し當地に金工品の蒐集家があれば面會を希望する故、知事の紹介を賴むとのことであつたが、之を聞きたる千頭氏は非常に困却したとのことである、と謂ふのは、今英國大使の口振では歐米の上流社會に於ては、日本の裝劍小道具の知識は殆んど普遍的である、其深淺こそあれ、誰れでも其嗜味の無いものはない位と云はれて居るのに、知事始め宮內省の接待員、縣の他の高等官等可なりの人數が此特殊の貴賓に隨行して居るのに、其全部が裝劍金工品に於ける知識は皆無なりとは。ドーシテも應答せられず、何にか市內に蒐集家とか嗜者は居ないかと俄に大騷をやつたけれども、何れも要領を得ず、結極日本人は日本裝劍金工品に無識なりと云ふ許りでなく、薩摩の上流社會が薩摩金工品すら承知致し居らず、此遠來の貴賓に對して日本人中話し相手になるものは一人もなかつたと云ふことになり、英國大使は他の英國大官と互に金工談を交へて其日を過されたとのことである。

予は想ふ、外國の事で日本人が知らぬ事があると云ふは差支ない場合もある。然しながら、日本人でありながら四五百年間日本魂の裝飾として幾千人の藝術家が心血を濺ぎ、祐乘作

や宗珉作小刀柄目貫の紛失には、家老重職が其責任を帶びて切腹するとか、其悴が紛失物を探す爲めに日本中を廻國するとか大騒せし程の、種々のローマンチックな歴史を有する裝劍金工品の知識が、當代日本人間に於て殆んど皆無であるのは果して誇るべきことであらふか、彼れ歐米の上流社會では、後藤とか奈良とか横谷とか金家とかさては信家とか、大相撲の所許りではなく、薩摩の金工小田、知識、卽ち直香とか兼矩と云ふた所で、無論一地方の雄ではあれども、謂はゞ田舍相撲たるを免れない金工名すらも、鹿兒島見物の途次、偶然と思浮ぶ程の金工通であるとは驚くと云ふよりは寧ろ呆然自失の次第である。千頭知事が此時許りは冷汗背を沾したとは誠に尤なる事である。

千頭氏は引續予に云つて曰く、北印象未だ去らざる本朝、上京の途次兵庫縣廳を訪問して、話次永井書記官に此の大失敗談を話した所が、永井氏は慥か當地に居る桑原がそんなことを調べて居り、且つ參考品も餘程所持して居ると聞、ゆへ、之を訪問してはどうかとのことであつた故に、御邪魔せし次第との事であつた。

予は千頭氏の希望によりて、祐乘以後金工家の參考品を取出して卑見を述べて半日の閑話を致したる次第であつた。其後千頭氏は東京麻布仲の町に僑居せられて、鐵鍔の蒐集に取かゝられ、氏の逝去頃には其數も約一千點以上との噂であつた。殊に薩州金工に付きては、英國大使の質問に刺激せられて深く之を調査し、御手のものゝ英文で、蔭摩鍔に就きてと題し和蘭ト日華山者工と羊虎してジャパンマガジンに長文の工錄は其儘の獨逸文となつて伯林に出版せられて居る。其他ヤコビー君ジョーリー君等の出版我裝劍品に關する著述も、亦尠なからざるものであることを讀者は一顧せられんことを希望するものである。

終に臨んで、元來何んで歐米人が我裝劍金工品の研究を始めたかと云へば、其動機が版繪に共通する所があるのは予は誠に面白い點と思ふのである。歐米人が我が版繪を賞翫する理由は何んであるかと問はんに、彼れには我版繪の如き多色的のしかも木版は殆んど絶無であると云てもよいからである。色刷はあつても極幼稚であつて總てが單色である、伊太利邊の古經典には筆彩色で多色のものはあれども、印刷物としての彩色版は先づないと云ふてよい位で、日本の版繪の多彩色に一見驚いたのである。殊に木版印刷より生ずる色彩上の效果は、他の金屬版より生ずる效果とは全く特種のものであつて、色の對照配合袞摺ボカシ等の調子や技巧が加はつて、歐米に於て曾つて類例なき一種の藝術品たるを驚嘆したのである。此と同じく、我が金工品も殆んど萬國に類例なきものと云つてよいのである。予は可なり多くの歐米博物館等を觀覽し、埃及波斯希臘羅馬時代以後今日に至る金工品に注意を拂つたが、銀器金紋とか、薄肉彫とか、丸彫とかは申す迄でもなく、或る地金に厚き鍍金をなし、之に彫刻して俱利の如き氣持を出せしものと、其他金工彫刻上種々の工夫はあれども、我象眼片切とか色繪高肉とか稱する一種の金屬上に、種々と異なりたる金屬を嵌入して之を彫刻し、其上に更に他の金屬を象嵌して之を彫刻するが如きは、全く萬國に類例を見當らないのである。殊に最も歐米人をして驚嘆せしめし事は、烏銅と黄金より成る赤銅、銀と銅の合金より成る四分一の色彩であつて、天鵞絨の如き漆黑なる赤銅、古色を帶びたる眞珠色の如き四分一は彼等の驚異であつた。多彩色が日本版繪の一特色である如く、多色金が日本金工の一特色であるのである、故東京美術學校教授海野美盛君が明治四十三年倫敦に於て、日本特殊の合金卽ち赤銅四分一の製作に關する公開は、歐米の嗜者に非常なる衝動を起したることは、當時在英日本人の知る所である。版繪の多彩色摺に就きては、同年頃漆原由次郎と云ふ人が巴理に拉し去られて、日本的の摺師の妙技は完全に巴理を中心として歐米に傳播した筈である。然しながら、色繪象嵌の技術と其地金たる合金製作法は未だ完全に歐米に傳授せられざる者の如く見ゆる。尤も先年寺岡美根親氏ありて、彫金の技術を倫敦に公開して其實際を示したれども、遂に日本金工の彫實法は未だ歐米に傳播せざる者に似たり。左りながら、予は信んず、近き將來に於て歐米に於て寶石函指環函の如きものに、日本金工の色繪象嵌を應用するの時機あるべきことを。

論說を寄稿せられたることありたりと記憶する。

此出來事は我々日本人に取りては餘りに意想外のことであつて、信を措かない人があるではないかと懼るゝ次第である。千頭氏死去後の今日、生きた證人としては前に述べたる永井環氏と、當時宮內省よりコンノート殿下に隨行せし顯官に聽けば能くわかる事と思ふ。永井氏は一時東京市の高給助役をなして居られた樣に記憶する、無論御健在と思ふ。

今日我邦人の世界的美術一呑と云ふ氣勢は誠に喜ぶべき現象であり、又世界的美術の智識、世界的知識と云ふ口の下より、日本人でありながら、日本美術品の一部の知識が、歐米人より數等下ると云ふは愚か、多くの人々は、殆んど皆無と云ふて差支ないのは餘り褒た事ではあるまいと思ふ。其の證據を手近に求むれば、過般出版せられて、日本知名の博士學士其他の權威者が編纂せしと好評嘖々、洛陽の紙價之が爲めに高しと噂ある某書を披閲すれば、後藤祐乘をゴトウスケノリとなし同宗乘、乘眞をムネノリ、ノリマサと呼稱してあつて、恰も雪舟雪村をユキフネ、ユキムラと呼稱する以上の大事件である。祐乘、宗乘、乘眞、後藤家は全部漢音で讀むべく呼稱す可きは論を待ざる次第である。此書が若し海外に流布するならば、コンノート殿下の一行は固より、歐米の我金工研究家は定めて驚くことであらうと思ふ。現在に於ても盛んに裝劍金工品が彼れに研究論議して居らるゝのに、我に無關心であるかは想見すべきである。アゲ、モスレー君は嘗つて後藤派に就きと題して大講演を倫敦大學でやつて居る。聽衆滿堂、其印刷物は述者の手許にある。長屋大佐著の肥後金

後藤一乘作の小柄に、赤銅へ片切りで奔馬を彫り、蜘蛛の巣を纖細な金象眼象で試み、裏には『蜘蛛の巣に荒れたる駒をつなぐとも二道かける人は頼まじ』といふ歌を彫つたものがあつたが、典雅のうち又洒脫な所のある、如何にもいゝものであつたと時折り思ひ出す。（原風生）

○貧民窟に別天地ひらけの研究家から流しを学ぶ
の一真ひあり。社会学の研究ひ若河八十雄と
いふ人は目この方面の探検家にして今ひは北海道
の第一人者ひあらう。全体貧民状態の研究は
此頃のうひ一番早く研究らしいものを出ま
しとのい横山元次郎が日本のひ場社会といふ書
を刊行しとのが恐らく初めて、それは明治三十
年ひあるが、段々行届いたものへ。若河八氏
の研究は二十年位前にして随分苦労をしてゐ
る。それ丈に南白馬分子貧民の実状を
詳しくひみるのうそうく。最近の北の方面の人口
を救ふとう窮境を出すあるて

横原蔵

家里の母前とも乗行きの軽旅をと
をやつてみる。古賀物産と貶位の神の方かあつ
た時分などは貴族の子在かもんすは此人が其の校
あこ没落やつと茶屋の娘(紙屋)
茶屋の娘を救かしあてとかそれは本当に
みて古賀洞といふものであつたが、洞のまは兄が
あつてそれが早く矢張してどこかみるか合
らうそれのを偶然のまから兄人の内る古
賀屋深といふを救かし出しそれが洞の兄ひあ
ることが知れそれを洞の家に納めたが不幸
にして洞が早もうく死とのひ亦く一家離散
の窮境に陥ひ深は幸ひ兄人の群に復帰

有りしなどといふ話もある。
貧民間の話を断片的に書きつけると、東京の貧
民窟は新網、萬年町、鮫ヶ橋などは皆
有名と云はれてゐる。貧民の住居はさまざま
で空長屋もあり集団住居もあり點在もあ
るが其の通りであるに拘らず、之等は空き家と
いふよいのであるが、不空居とすると鰥寡
境遇で長屋や間の三畳でおよそ四種ある、即
ちドヤ、ヘヤ、キチン宿のものへ部屋ハ
屋で一室十人を容れる、外にサブルといふハ小
屋で、ヨカことといふが此の宿である。
細民の住する別天地に欠くべからざるものとしては
業とするてみるものハ損料貸、多くのものが文字
を知らないから代書人、次間あり浴場（慈善）の浴
場ハ湯銭を要せず、其の他特別の
ものがあるけれどもそれから之等しや之ハ
有利営業である。而して見ますると李子氏
の様な者さを数くる所もある。
いくら細民でも多くの享楽がなければ生きてハ居
られぬ。僅か許りの銭を獲ても見る子と米や
酒を飲むもの果や米を買ひ家で、そこで家に帰
へると夫婦喧嘩がおこる。婦人の手内職なども
終日の働きで十五銭位を獲るが関の山で婦人の生
大福餅を買つてくれて拘する事楽が一要あること

の享楽主義と刹那享楽とをつなぐものである。彼は
ホトトギスの写生思想のうちに含まれている刹
那享楽を模倣しようとしたが、彼は模倣しようとしても
心蕩び甲斐文かうとしても、刹那享楽を控へる
のい生き甲斐文のうちへことをうるからだ。俳句
如なることは生存の原則が俳句の生き
てみるうちの細民い割合に貧窮
と俗くうへいうのドシ〳〵ふえてあるうち、ミジ
メなうちの病者である。山年満生命をい
起つて遠藤業に供給されるけれども、今日の
こんなのから、業があつても俳句は発かれまへ
ばならぬと文へていい満生命を救助する役之云

いと云つた。

○自分の同宗が所かも同甲び乎く故人とうつたものが
或人かある中で、自分い時で貧乏雄を悲び生
して、彼んかエロテックの方面を淡柄とすることかあ
る、旧友の涙ましうへが、彼んまえ公ねと悲むの生未
ましうへ迄ましかが多くある。彼人大阪の和田の者の
家に生れて彼んの父も祖父も歌人であつた。
去雄いうの無院を引き大名び一所ましうた頃か
ら歌を詠んだ。四方のすがいくうあつたやうに
か漢学の力い全く無つた。日本外史ましう渡めう
い位であつたやうまう学くる。俳句日課ましう勉
勉び、学の河の大かひどくあつた。とんな課目

びもなき婦人なれども高貴の出なれども世情に疎
き事は如何ともなし。常識の欠けたる事は世情に疎
かつたる為めに毎日同室の婦人に嘲弄を免かれざり
つと。彼女は地球儀を菱蓉の世界に恋し
メけんを、恋を遂ける為に毎日同室
して寝ることを異とせり。彼女は
吾々は婦人科に合はいろ〳〵のことをいふてまもるし
メ法科の方で砂川（雅俊）が口説しとうやら
相手はしてやつたのは卒業の後であつたとう。北
女中はお末とそのてる色男の紀湖しと十六七
の女でとこやらく愛嬌があつた。同室が北の蓉
蓉屋に行く毎にお末を揶揄したるのある時

高田が勘定をするあとに二銭足らうといひ
お末に立替を頼んで清算した。女後高田が偽
然もなく遠かつた所へ行く
都合高田さんはどうするといふのは二銭の
貸しがあるからそれを
賀は悪戯きと早合みを（をしを焼持をした
ことをもあつた。為賀は卒業後同宅で
早く没した所で馬の妹を妻に貰つた。北の妻
君は年和南学の問題を
女であつたのでその問題に時々論評があつて
その論評は常に同期の友人（高山英吉）が無
護士である所から女の衛に常つた女の際か

先年原敬首相が「高山の目前に立ての主張を口
述して年つゞけたのであるが、果して非常に何んの為
めか知らんが、和解の際に何ら条約の契約をし
たるとも消息なきことである。
而して賛成の意を云へば、従来くとして四方をとりき）義
が有つて、追々まつぬの学問も通じ後の国際学
者として抜面白きことをとして、私漢の学問や文
章をもいつしか学者（達）して日本歴史をかいろう
国勇をひかくり回つて一種の国見解を
附したハーバート、スペンサーの社会学を実用
が文学詩したが学詩別かるこうと。国際法の研
究から外交時報へ生んで、彼れの其主義とな

つて論壇に主つたがこの世を認めえた先角外国
語が役人の得手まで有つて所から、赤十字社に関
係した。の家の歳後の参謀部の幕僚として
つて従事した外国を行くことが多かつた。これも国
際法学者として支那は出うの後に表世論の顧問
をつとめた。しかつて彼れが第一部と
国を辱しめるやうなことがあつた。
といま一例である。
全体有賀の同志である人物は好きである
ようなる者々の肌合と違つて、東京帝国大学の教授
の時でも彼れを私手のしろうと。而して彼

のも学問の為る割合に地位を得るのみ仕合せ次第にしたこともあるのだ。そこへ八田家の迎ひ氣の毒に思ひ早速に入んとのである。彼が大隈侯を知つてゐるのは、明四五十年史の編纂に当つたのつながりの地関係からで、素世嶽の聘に応じたのも亦大隈侯の好意に因つてあるが、彼は老の姿とそうして美の顔に泥を塗つたのだ。只八一時苦絶交するに至つたけれども、よく考へてみると、彼の人間の無い男で、淡泊に器ぶるのは寧ろ彼を買ひ過きるから、彼と自分は個性の違つてゐる彼が早稲田に投するは自分をも疎遠過しとが二十年目位に彼の家を訪ひし時、自

然懷旧涙も出で、私からもお未の消息を尋ねて見ると、あんは自分よりも冷静で、彼が到頭人の妻となつたことを、よかれ悪しかれと、何せ出しやつたかと話すと、出したのではない出て行つたのだと欲望を満たしたと、彼の無邪氣さを一端は[illegible]わこんで居られる。等つも[illegible]賀島村（浜名）で、伊勢の講演を出かけたことがある。山田の旅館で戸田氏に着すると、私の相談をするやうに、立てた三人の妓を命じたこんが彼の帝習で三人中一人のお伽を得た人為めであることは知れてゐる。実は彼の非常識と日本の花柳に通じ、大いに西洋の女郎の為すこと

ある金銭を與へんとの心なりしも
と思ひ為すことなり彼れは吉原失敗したれば彼れは
三枚を打手のいつまでも寝の名田者現三人をうつ
て挑むことは無法も甚しくどの者知する筈はな
い、有りても困り果てし私の寝ておるのを起して伴
を頼むから、大市（島崎楼）あなたの内にして出うけて往つた帯
を呼び戻して、やつとのことあるを印へて片
つくと、型前彼れの得意は偉いものだ、考きりま
此度の好運を鳴し出発の汽車まで知らせ
るといふから、自分も始り当分、室内に面人を連れ
こみ、勝手なきぬぐしの別れを惜めといふて辛か
して汽車に乗り込りの雑を見かねて汽車まで

幸ひ他の客も居らざりつたので、有賀は先きうと
此夜の成功をいつそのろけるので自分はおかしくな
つて、実は君の名敗を思ひず斯くくして
自分の為に救つてやつたことも知らず彼手の勢を
吹くの女を得ずとキメつけると有賀も唖然
として私の謝しとか、実は深謀遠慮の賜にアテがつ
とのの婚姻であつたと、うんとうと思つてみるへの
の折のけるの野蛮の者と思つて其の秘密の折
保留しな
有賀が中風と羅つたのは名古屋で其際私は校
用で大阪の出張中であつたが、長文の電報
が達したので直ちに馳せつけて見ると、事の

軽度で言語障害は全分無つたのであつた。彼れは漸やく回復したとは云へまだ全治に到らうとする時、表の廻廊として支那の趣いたのである。彼れは出掌のまゝ早稲田大学に来て、高田氏を相手として左様所謂入つたか、問もなく私も来てくれといふから出かけると、有賀の言ひ分がおかしい、俺れは病を抱いて行くのだから遺言を高田君にして行く積りで今話しかけた所である内に考へると。高田君だけに遺言しても高田君の方が早く死ぬかも知れぬのと、そこで君をも煩す所以だと、相も変らず奴有賀式と一笑を博し得ようとする。有賀が支那へ行く前にあつたやうな思ひがはつきり

記憶かうい、どの道病後であつた。貴今の郵便新潟へ講演に行くことになつて有賀を伴はんとして交渉すると私は病気だから行くは就て保証がありたいとの事。えゝ何かと考へて見ると有賀の帰りを連れて行きたいと言ひのであるから、私は無論等閑の看護婦の看護婦ひとへことを知つたが言ひ出すしたのおくれでせた新潟の宿に着き内々世中の支へて見ると、あのお客さんの部屋は滅多の内けることい出来ず、まもなく其の消息を受つた。たかし有賀は病客の情況と人ならぬの時ゝ私の言ふ来るのを、

所謂看護婦の顔を見ることを得ようとは、実
に思ひも寄らぬことであつた。私の郷友坂口五峯が、私と
共に有賀君を招いて一席の宴を張らうとは、有
賀君も生面であるから、君らうまく同席を勧
めようとのこと、出かけると、五峯は有賀の看護婦
の姿をとうしてはつと、既に呼んであつた。そこ
て五峯は例の悪戯性を発し、有賀君に
看護婦の附添があるそうだが、こいつは来て
貰つていいとうかと言つたのと有賀は否とも云はないの
で呼ぶと、を入れた瓶を持つて間もなく席に来たので私は初めて見ることを得た看
護婦を名とした美妻であることは云ふまでもない。

有賀君は左右に女を置き得ようとしてみるまでもなく
美男子もの寄さは戎千人であつたと。
有賀の好色も病的であつたかと思ふ、自分の亡友で
あれるほど エロテツリの傾向は強いとは無い。
しかし彼の妻の浮気は強いとあるが、平常常
識が崇つて、支那人を物相後に交はすことは実に
無く無の毒であつた。彼は塩原と別荘を有して
おとなり、自分が日所に滞んだ折、八方振りて五ひる徐
来しとの事、最後の会合であつたとの話。
が、折柄、紀元会があつた。其の人柏
例であるが、其の三井で其の他位を有して
みるのは、此の方人に対し何ともうく人の忘ること

任して居るのは殆んど藤坂氏であるまいか。四月雪池
○余が旅行に送して来た他の一人物がある。それは
火薬の発明で有名な下瀬雅允氏。私とは
全く畑違ひの人であるが、此人と相識るやうなつ
たのは亡友田原栄の紹介を援るのだと。田原も下瀬
も共に長崎の人で、且つ応用化学の学問も同じ
かつた。但し下瀬は工部大学の出身で首席の卒
業をした秀才である。此人は最初印刷局に奉
仕して紙幣中の偽造を防ぐ一種のロイキを工風
したと聞いてゐるが、此人の手腕は印刷局に伸
びず、海軍の技手として、爆薬研究を
機任されて居つた。其の才が認めて現れた。所

謂る下瀬火薬の発明は世界的の一大発見で
海軍の誇りは之れを加へて、日露の戦争
に敵の心臓を之れで突かれたと
此の火薬の創造とは世界のどこかの国
も似た様な発明があつたが、下瀬のは全く
独自の工風で出たのだ。然し同じいものだとも
偶中にあると云ふ云ふことを思ひ起す。
此火薬創造の功績を受け赤十字の博士
賞として表彰された。隨分色々研究を
した試験をした爆薬の作製も
したことも。下瀬は其後
ある、幸ひに其傷は手の指を

頼まるゝ止まりとなり、死後の報が市内に知らるゝ頃
丸に時々は一世時驚驚し、下瀬は惜しいこと
と共に若く死んだが、快活な性質で勉る酒量
もあったとのこと一二合或る席で酒を飲んだことも
もある。平生義理を重んじ酒のよ[illegible]を平げる人で
あった。自分の地人に頼る所があるのは、一方
年の世話を頼んだことで幾月か其家庭に留
いて貰ったこともある。此少年は私の姓を買
ある其代四とあるこんを知らぬの叔
父の子であるのを立六才の時世話を受けた
ことがあるとのこと。天性火戦が好きであるとのこと下瀬は
頼ひことをくるうと後は砲兵工廠に職工と

横原製

して勤めることとなったのも下瀬の紹介に依つた
と記憶する。此者と下瀬とは
術学校を卒業してみるが其子が美
○古城の木下逸雲と如雲の別称がある。世間が画
無理解であるのを憤慨した生きてみる間は蝋の殺中
の生涯が如くだと云ひて和歌を詠して其意を寓した
不幸識を持した江戸に来て志摩の物産船が霞
浦と称して仕事をする。江戸に来た時分に人に
解らない画を書いたとのこと先ず憤慨からでも
くり、細川十洲が狩文画者画操安の序に倣
雲の表情を叙して
解して書く

年啓　時下益々御壽昌の段賀ノ

拜啓　時下益々御清昌の段賀し上げます。扨坪内逍遙博士が古稀の齡に達せられるのと其半生の研精になれる沙翁全集の飜譯完成とを記念せんが爲に發企されました演劇博物館は、大方の熱心なる御賛助により豫定の如く昨秋竣工を見ましたる段御同慶の至りに堪へません。而して同館は發起人會の決議により早稲田大學に寄附され其管轄に移りました以上將來の施設には期して見るべきものゝある事を信じて疑ひませんが、尚其發展大成を促進せしむる目的にて別項の如きドラマ・リーグ（演劇聯盟）を兼ねた後援會を設立する事となりました。就ては公私御多端の折柄御迷惑の儀とは存じますが、何卒御賛同の上斯道の爲め又世界に類例稀なる同館の爲めに、奮つて御入會賜はりますやう切に願上げます。

昭和四年三月

坪内博士記念演劇博物館後援會
會長　市島謙吉

坪内博士記念演劇博物館後援會々則

名稱事務所

本會は坪内博士記念演劇博物館後援會と稱し、當分の内事務所を同館内に置く。

第一條

第二條　目的

本會は坪内博士記念演劇博物館に對して、設備の完整内容の充實を援け、該館の大成を促進せん事を期す。

第三條　事業

本會は前條の目的を達成せんが爲に凡そ左の如き事業を行ふ。

一、講演會の開催、圖書雜誌の出版。
一、演劇、映畫及び演藝の寄附興行。
其の他。

第四條　會員

一、會員を分ちて賛助會員、特別賛助會員の二種とす。
（イ）賛助會員は年額金五圓の會費を負擔す。
（ロ）特別賛助會員は年々金拾圓也、又は一時に金壹百圓以上を醵出するものとす。
二、會員には左の待遇をなす。
（イ）會員全部に本會發行の小冊子『演劇博物館』を毎號贈呈す。
（ロ）賛助會員には催し物（興行）毎に優待券を贈る。
（ハ）特別賛助會員には催し物（興行）毎に特別優待券を贈る。
（ニ）本會發行の出版物を割引す。

第五條　役員

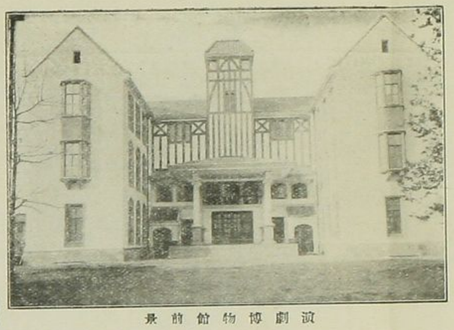
本會に左の役員を置く、各役員の任期は三ヶ年とす。
一、會長一名。總會の推薦により之を定む。（但最初の會長は發起人に於て推薦す。）
二、會計監督二名。會長之を囑託す。
三、理事十名以内。會長の囑託により會務を處理す。理事の互選を以て理事長一名を定む。
四、委員若干名。會長の囑託により各種企劃の遂行を分擔す。
五、顧問若干名。坪内博士記念演劇博物館の設立に關して特に功勞ありし人々の中より會長之を推薦し、諸種の企劃に就きて指導及び援助を受く。

役員

會長　市島謙吉
會計監督　井上辰九郎
理事（理事長）長谷川誠也　中村吉藏
委員　仮塚友一郎　武田尾吉　林和

顧問

五十嵐力　池内信嘉
（侯爵）大隈信常　大谷竹次郎　尾上梅幸　金子馬治　川村德太郎
幸田成行　小林一三（侯爵）　石渡敏一　伊原敏郎　上田萬年
白井松次郎　砂川雄峻　小村欣一（子爵）　澁澤榮一　鹽澤昌貞
中村歌右衛門　中村雁次郎　高田早苗　田中穂積　坪内雄藏
（伯爵）松平頼壽　松居眞玄　平沼淑郎　平田讓衛　福澤桃介
山本久三郎　山本忠興　三上參次　安田善次郎　増田義一　池田大伍　河竹繁俊　楠山正雄　日高只一　山田清作　吉江喬松　大村弘毅　小寺融吉　高田保　伊達豐　永田衛吉　種村宗八　深澤政介　本間久雄　水谷武　山崎覺次郎
（五十音順）


演劇博物館前景

※前記規約により御承知願へる事とは存じますが、本會は一種の演劇聯盟（ドラマ・リーグ）な筈れたものでありますから、お氣安く御入會下さることを希望致します。

※既に決定してゐる計畫も三四ありますが、それは事業の性質上追々と發表してまゐります。どんな計畫があるだらうかとの御懸念もありませうが、演劇博物館に好意を寄せてゐて下さる名士、俳優、劇團、出版書肆等は少くありません。次々に發表して行く我が後援會のプログラムは必ずや會員諸君の御期待に背かないでありませう。又副ふやうに努力します。本會はその都度會員の皆樣に對しては最も有利な方法に於て優先權を與上げるのであります。さうして講演會、演劇映畫の會に御來會を願ひそれが直ちに演劇博物館に對する皆樣の寄與ともなるのですから、眞に相互に有意義な企てだと信じます。

※重れてお願ひします。坪内博士記念演劇博物館に好意をお寄せ下さる方々、劇や映畫に趣味をお持ちの方は一人でも多くお誘ひ合されて、どうか御入會下さいますやう。（會費は左記宛に御入會と同時に御拂込み下さいまし。）

東京牛込早稲田大學　坪内博士記念演劇博物館内
坪内博士記念演劇博物館後援會
電話牛込五一四番　振替東京五武五九番

本會最初の企てとしては、坪内博士に懇請の結果來る四月下旬本館竣工第一回として、同博士の「ベニスの商人」を中心とする一幕、二幕の行事、ベニスの商人に關係等を三時間像にわたり御讀して下さる事となりました。尚五月初旬には本會の爲にある劇團が熱演してくれる事に決定してゐます。

○家記に天平紙金泥法華一卷あり、元興寺の花池
より、天平法敷と称せるも元興寺の舊物
最も稀也寺の炎上と共に資財烏有に帰し
公故なれん、此寺本邦最古の創設に属し、其の貴
什最も貴し、余仍て寺の緣起を得て法と保
花池と称す、偶〻坊間に醍醐寺元興寺緣
起の複製なるものを見る、一帙五冊古典保存
会の複製なり、係る、桃印紙の料、紙に配する
こと、則ち鮮かに入るを云ふ
北緣起長寛三年に記せるものなれども大
部分は天平十九年に由上んで古緣起の文
を録せるものなる也中ごろの推古朝の遺文を

傳く、当時の文体もとより料とするを得べ
し、北原本は四寶に指定せられたるものなる也
四月廿日記
此日常盛氏一冊を獲り華厳宗附法図
を忠實の為すもの巻首に漢文茶契
説を掲ぐ、即ち華厳宗の祖に係る、素氏
の年法字版に附せるもの巻末に墨書
流改刷なるも、此書を顧き、余一時多く茶書を聚めし
るも、此書を得るが為也
本とする所
○石塔寺の所の花を新右弥苑の陳地に移
す、境全く掃し、庭樹弥苑の樹と連る、余

立子を作の曰く、西那須を今遠地なり女の
二廊を名づけて遊花荘と云、義（附り）と御
用邸あるが故に書生の語を借りたるなり、其
の長へ御（料地）に相陪するかなる陳光亨
と云へも敢て誣へくるなと、
○新戸邊博士の曰く、東西相觸れて」あり、
こん東洋西洋交渉の内容を関する内容を
言ひ現わしたるなり、支那人（支那の人）
せしたる（支那の人）支那の俗語なり
○男女の生殖器を東西とも（相觸れたるの）
八歩る雷鳴の音也、好笑
つ余ぬんで漢法（法）の陪事を抜き進に無依

標原製

を感ずるものあり、此相地頭南紀巳山坂内
成高の間宮信弟を抜き、中を高度一二
件あり、漢（法）解と共しに、余の立解する所
いまだ、ものを方へ立の高也、異なるあり、因
ものを、ものを、ものを、高へ高を感ず、敢て
其の解を求むる酒徒余と無を感ずるを知せるなり
唐津一夫、特年若法義、病廢、一夜陳
先大、延及其の家を際、忍其遊
而新事、多的且、釜鳴高を生、無天中
性嗜酒、直器鋼鉢於灰上、終日温飲
以代食、自是十便快有、数日其地

脫而去、數日、一句、不復書矣、

按人事、貪虐之甚、氣數神旺、而酒能鼓動施之機、滑溜滋味、以自得復其常焉、時勢之不可失、固如斯矣、

飲を解せざる者、河の一鍼とすべし

便秘のごとく不快のこと、余のぬきの酒後の肉を嗜むもの、比患あり、四五日、乃至一四五日、刮を服す、然れども便秘の患を除去すべきなるか、左の治するものぬきの丸、と称こりしきこと、

備中人、秀村流作あり、勝山藩付人右衛門

表、二年餘、不大便、而飲食如故、少者疑其延、而余則不然焉、余曰、卿一婦、必前二十餘日、而一厠、姓則必問五十餘日、而其屎不太硬、亦不太多、不知五日間所食之糟粕、何宜消化、弦不可將矣、頃之、稱府一婦、根来大溝毒、五年不厠、絶之鉄子人數婦、貼壓鉄於足心、而通云、其他及四五句者、余僅見之、

按世有數年不糞者、此一表也、酒、肉不消、氣力不耗者、而一本生行餘醫言、載不食中再患者、此月者、

不食而美美不厠而美濟、異宜而日因也、由一日三食、一日一厠者、觀之則一日不食、五日一厠、亦特不怪爲、自其數日不食不厠者、推之、則延及數十年、亦特不怪爲、而其病多在婦人、則經血之變如此多矣、

打撲と化す言を流すことを往々あり、自内宜のもいろいろの之れとう往々を流す、今亦一事実を為す

余所説者未射一先生曰、衛田幕年曰、一短特秘、其出田床頗于地破

数問固有之病而曠也淋漓、多年之間、遂病矣

○者拙の田舎の人も男子あるかのんというを為拙

ハ斯界の珍拙で大家比外に何人の者親かあるも

ろ〳〵、五十歳ろ〳〵のる国者の芝集ものも

をいつもれも待つけて、実と他法ハるハ。此り多優

祕話ひもろハ拙ろ比かに者拙ろハ実ひみる。実十

年も拙ちを集め一回ひも実印しとことかろつか

ら、実に実れこのに、この家を詰ひ比ハの話しは実

人と家ハ銭比のろハ比ハるとも者拙ひ理つて、比かろ意か

と心自生のろハ銭比かろいと云いんとみる。漸ゆく

者拙弟ちを入れんとうとの会が起りて、貴分のア

き未形ろ計りを為つてやつとかのんきな男ちを

ハを出ひき家、百ハ比ましいつ薬に整至するの

が紙にあと八笑つてゐる、本箱を運送の時つ前の
車のあと押をしてやつて、屋もちをついとうて勝
を打つて数の国祝とが出人の自分の故味
で家族のあくまるとものを犠牲とする多くある
が供えるとが必要のあるので買うとて拵えつてもえへ
必要があるへと拵んで、御自分の為只幹の不好
の研究を二三日以上も出しん買うておるといふ
風に。地味家いくらもあるが恐ろしく此人の及
ぶ、まへあるまへの。
○梅酒のことを酒屋の前を
通る度毎に注意すると、多くの神樂殿
の方酒屋に一杯人がやつてゐる。快楽い何かと入る

とコップであるが、その側にブリキか何かの金一尾に
心うとかめ赤ウロウで金つたものが見へた、方前に
あるが、一合拵らうも唐味がうい代で度さ
があるこんな一合の酒を移し、えをあ〻エッ
プで飲むとのとていうんだ。
○数菓の密或る一二ヶ所に目新らしいポスト
が目に入つた。普通のポストよりも細く、色は
淡黄のペンキを塗つてある。山ついて見る
とこんが兎行様を拵すべき郵書のポストであ
ることが初めて知る。料金は此に乗て大阪の指定
が始めてきえてある。三銭で済む郵税が五銭も
かゝる、神速ひもあるとかの。
○桃が盛義とり

爆後まもなく郵便物も動かなくなる。右の如し珍らしかりしきのこまつこんにたしなしたる一異人なり。他日へ遊くくこんが速達郵便として採用せらるゝにあらうが、今日その草創の實況を叙するまでも。

○次の日の熱海の三老漁夫筆記から紙づうの話をとゞめまんれたが、高田と坂西と云ふ者の資格がなかつと迎ひとが、自分い郵が詳つた考へをえうと根性まいをうゝ因縁がある、いつもやも根性に就ての回顧を話す。詳しいことがあるが、ここはあらまし記をあげると、日新社の讀賣新聞のあとを把て每日まゝ自の松

田という料理屋の跡を云ふ。時まゝ北川という料理屋と出うけ、山内黄南が出資の河の義を市尾の真中に井護士を雇ひ、北川まゝ其の時、書いそこに同居し、北川まゝ其の隣りに新聞社を構へ、北川まゝ出うけもした。社員の一部は服部誠一の九春社があつた。内務政事一部は自分行し此時に日新の編輯局ミ部を把り、尾佐河の日報社を横丁に福沢横尾と福澤を戴いし此ことも新聞と関係するとの言へ。大村尾と云ふ新聞や狐殿をも折々出うけ、伊藤幸と洋服地を売る二階に下林橋作が此ことも数分

ある。西洋屋敷のように高い家があつたこと丈は
代々へ毎週訪問した丈を覚えて居る。
因に浦かた氏世話に成つて全く忘れ難い紹介の光栄を
つとめる為、今此の[illegible]その紹介状をもらつて来た。新橋の
の大中の料理屋を見らしたが、こんな伝説ではうるま
い。

○北海漫筆分が流行で、皆を集めて堅くるしいの
と軟かいのといろ〳〵あるが、その発端に載つたの
を読んで見ると、とても砂糖の如くうまい。
第一、絵ゴヨミ家の時里帰を祭る為大隠
でもてなし、事実五月の新解けての無茶憲
を流るゝまで、業況といふ博が坊けるから、よく〳〵

譯かさへ。身分いきんの事を考へても此度寝と
乳〳〵と漫海の粒のようなる放浮時代の夢
を見た。夢とはあるが実際の事である。
芳原と廓の木屋といい酒屋があつて、
八酒を売るのが為で、子供を抱く家
では毎つた。ある時郭の序心と云ふ者があ
此方をおもうもいい家、お東さんしますといふから
芳子云と絶かすと連れの人とのへ此家に序
此は実に頼んで一家を借り受けた。ゴヨ一家
といふ狭いおさくるしい暗い部屋であり
此が基所の外まへ此の家は八の家である。
序心は赤毛布をかぶつてさアこいで家

今を開くといふ成るほど酒屋だからどんな酒
もある、客人今が開けたのでもあるまいが、下物へとう
するといふと、北の酒屋といふ仕物
が柳に美しくあるそれの魚の切身や豆腐や
大根に海産などの類で、何でも下等の娼妓
の別会抔とても用意をするとのことである。既に
大洋の北海の平等はそれも一興と
思ひ五屋の仕抔をとりて飲んでゐると、
下等の娼妓やそれこつうれてゐる女やが
つて来もいろ〳〵と客を買つて行くすると花
魁の名をといふそれ抔を掛て行くとあもつう
て其の実業がおもしろくつて、酒が美味加

こはつむ、序だに清元をうたうてどうでげすな
どゝいふてゐるそこへ後から手茶屋の山
口屋の主婦とそこへお国といふ藝者が
来てゐるのを呼び入れ此所流れの枝も葉
くの四方の客ここ花のうるいに秋子で
あつたが序だに真面目に実は此客の掛け
田るから渦まきの如くに北の羽織を着る
おつて行つていくらか傷りて貰らとくいと淡す
さと、お国いそんな事をもとりすしお行ら
なさい、今一寸稼いでくるのだから悔くうる自
らが掛けるといふのそれを序だにそれも知れ
えまで行てぬといふりもお国ともちる

く叫び縁を抱くて㊤歩き出すと序此に残し
出してお前さんを撫いたのと大笑であつた。
こんなどい漫画の好材料であらう筈の
者の口から流し出る事は、茶の木屋に飲んだ因
仲の連反へ故人なる流谷橋番であつたと思ふ
序此と言ふ帮間に無茶用の男が演説の真似も
やつて笑はせる位が能で、芸者に寄る恰合のあ
てあつた。此次の五人くの流連振へ可なりとくらし
かつたらう。朝切りの土堤の平林や田甫の内庭な
どを一杯を傾けると、陶然の物句又と繰り込みなる
る。保し流連かつくと流石この引手茶屋の手前
極りがつるく。㊤五つ大門に入り込む門おこあ

果物屋に腰かけて無駄話をしたり或は筋向ふの
酒屋から酒を呑づから取め来つて飲んで時を物
し、芸者のお中が出て来るのを待
のが例であつた。此次のね)び方は先きも増樽
こ上るのが奥ちるのであつて、此の別天地こ立ること
が奥であつたのだ。適分茶屋を困らせた。茶屋
は客を撫任する世中があつて、客又金の方の時
は此世中が主婦くて、手代りいつも紙入は世中に
預けて、勝手に中を抜けさせもし、主婦を取ら
せもした。江戸子義侠がこんなかるの㊤まだね
立してゐる面目と保はしもるる。女中は動も
まん心煩まで笑いて遠引いたとの。茶屋の者

しい道)霧のようなが、接伴の世中のハ飯りえ無き
霧びあることが出来ず、北等の事も廣博
の一端である。

かえい藩邸の放事に飲め、深更帰宅と称
して宿すること、一友が芳原に遊ぶくの名
拉んで、えんを不潔の家に行くものかと、伺内を通
とせ：漫歩をつけて、新橋の停車場まで
行って、えんから京戻って九段の坂を登り
ものび、ちょく夜桜の
下の茶屋に休し、(休憩をる)う
人：えうえんことも、後ろ人男女花柳
の物心とそれの
反動で、前に謹直ひ

つれ丈えんあとハ私暴であったが、これも人間
学の一段階ひ生活二ヒハ紅ヲけんしるる
課程ひあるとも云へ得るる

当時の芳原ハ本郷といって市級の娼楼が五軒
あり、えんハ格式を高く持して義人を客としえ
つた。若しそうの花魁の道中でも片鬢を
留めて居た。その道中を見ないと思って終日
機会を得ないえんハ検徴の当日、稲本楼
の花魁なれが、揃って、稲本ハ入口の玄関
の上へべうンが、あって、えんを上って見ると、北の
道中が眼下に見へるハ何論、四方から検徴吹
き行く娼妓の終繹(絡)が如きも白書に見

るのも一興でもあるが、近今中まは白粉の剥落したのや、
改造を引つるのや、服装の垢じみたのや、中も花か
どがあるも、百鬼の横行は斯くやと何となく情
慘の感を催せしめたり。

下宿生活は書生の往べき一境遇であるが、自分は
親族の家庭にあり、大学時代は学費金と
起臥し、後ろは父母が上京して家庭をもうけ
から、全く下宿生活をすべき必要が無つ
た。然るに放埒時代の下宿をすることも一方
便で我儘が利くから、さと下宿をしたい
ことが一二度ある。共に神田で今見へのある
のは北神保町の稲荷の祠る陽の下宿で

にあることがある。それは三度に勤めたる所、そ
の前のみたのは猿楽町で、あつた。下宿に
ても然手ぎわをすることをしてみたから、下宿の不自
由を備さる感したと謂ひ度へ。その頃今川
小路神保町なる一ツ橋の大学生を待つ
書生相度の欲食度がるくあつたが、
思しきのは松月といふ天麩羅屋で大学
時代のは弟妹出うけしたこの店、金沢橋は
大きくうびあるとこれも書生を得
とする家びあつても、大抵の人合は多くこ
個さえる自分が下宿時代まは朝食のみ
方ゑる飯屋しとからく下宿の粗末を嫌ふは

無関係であつた。随分滑稽を演ずる男でも
大丈夫紳人のみるとこと利用して大枚百円の
衣服を新調し、美か出来てくると直ぐ
典して花千の金策をつけることもある。下
宿屋の細君から衣類を借りて美を典し
たこともある。当頃の下宿屋は人情味があ
つたやうな男。勿論書生も今のとは異つて
信義が厚かつた。物を借りて踏み倒すや
うなことは無かつた。

○三十一文字の四季や十七字の句に含
蓄のあるのがある。

花をのみ待つ人に山里の雪間の草の春

を又たでや
磯まもい海のも蕨きて時雨かな。

○以来自分のよかる癖に寝覚眠覚めて酔を
求めることである。一瓶を作して閉じようとすると、先毒
がつけえで、自分の花のような顔の舞姫と浮世
するのは困る、自分としては何も敢も覚えてゐぬ、男
といふ奴は都合のよい、よると見へる。毒は迷惑を
感じたことは決して忘れて居るが、随分棚卸を
恐怖することがあるけれども、北海道へ行
きたいと思ふことも
少なくない。不如去時代は倉様家用の不充分で

妻を困めたこと、八取りてけ第の妻の情に情くぬ。志
かしどこの天明頃、ある年幣まれあり、鈴の事
で、妻が元を外に流らすもちろん、辛抱した婦道
を守て家を修めてゆく所に貴さがある。兎角流れ
時のことを考へると、妻に頼の上らぬことがある。志
後にせめていまを粗略にせぬやうしたい。妻の先
しい経歴に良くもあれば悪くもあれ、何人も知る通りである。良人
が日情を我の心に沿ひ高ぶらずに、あるべきである。

○雪の数茶中文作者に一珠書を贈る、「村国
村長饗宴の狂歌の稿本」、「紙五十枚を綴
りとるまで塗抹してある。数頃欲白い歌の添かき
ぶり、手柱でうまく知る度し、新人「蜀山人」

次くの狂歌は、而かも此人の歌集刊本に、
此稿に収むるまで心の全部でうまく思ひ入れまた
も、恐らく大部分ことに、一あつて二をきき
ある珠重に値す、便八十四也　四月九日記
六新国歌の一の強味を得べし、誤つて狂歌を作つて名を惜し人
多く其の一の強を知らず、寡き此人の不幸
也、彼れは放縦なる美婦を思ひ出でて其の親切と
ふ、訴遠維持に努めず謹義の人うつしと俗
「武鄙」が名称自論也
閑に任せて二三の歌を物す、

ある雪を踏まのこと見るるとん
たゝすむ方さへいつるる肌
あき人の花い紙は世界うて
たれも抱くて袖の雪
俤は春あるんと思うきんを
春今はいつをを八のいひげるり
迷をだれ入れぬ世郎の雪の肌
あるんをいかをあをつくへき
主をを河をひとあを言ふきを
あをを見て
川水のおひをけるをあを原は
うき世の人のあを捨る数

酒

とる酒は愁ひをえらぶ事とて
九八ちをもくまへともをく
炎を涙は繁酒を脇るも
貧こ小袖をまけてこのしむ
俤城の狐かこんをいあひ
あを狸のをと移をまり
島の俤を
春の八二十四春の一倍の
かゝ須は四十八九うをう
月を抱をとをうける給り
池あをやとをいひとつ移をる

はるにつうめ月とすみぞん
人のうらみをつうがいしけり
ぼすまを風にこそまかれ一とせの
うこきぬしとたまるものうち

又之

能因うたのこころ者ものの力うそ
字も墨をすくすゆゆとり

○知人より拝意を嘱やうに果さうとの漸やく多
しかるに間を倚て一氣に編数十枚餘帳七
枚を此の、尚ほ剩墨を存す、乃ち二十一品数
枚成る、題使ここに一掃快を叫ぶ乃ち女吹と

拝して九月拝祝社内の楓葉を観る、今年さる
蝋燈照れ天候の寒きを根もとうじオ報
す北海道降雪中と北地の寒氣起る面
し、拝祝社境内久しく思を入れず庭内
美をかのるこの一日して思ふ氣板を未らず
石燈を修むる等其方尤うるもの、流れ出づ
市街の陸中の往学罪死者こ弟して冷
落ろうさうを表ぶ、左都民衆の遊楽
の地こ至し、北の境内一公園なるを失わず。散
菓中釣具を賣るの家と立寄り、うきを浮
十数種を婚ふ、うきハ黄の種類や釣竿
をもて使う其形と其の色えりを異す、

あの段味あり、乃ち三れを小西架上のことなり。

○徳富蘇峰が己れの創設せし國民新聞を追放されたる悲境のことなり。国社の主権が資本家の手に帰する以上、追放されたるものは更らに世運命といふか、事業をするのは更らに悲境に陥ることを得ず、大阪毎日が三菱財閥を背景として、従業員に対する同社の利益配当をも蘇峰の望むまゝに同社の収益と云ふが蘇峰の生計に充てゝ故障なしやうなるものなれば、男子の出処進退として議すべきものあらず、彼れが政治の行跡を考ふるに、一向に卑怯なる態度を完全ならしめんとして、怒めるのは寧ろ吸茶の沙汰なり。況んや人が自分を大家と云ふことをば、恥を思ふが甚しいといふべきか、人動もすれば蘇峰を山陽に比す、類似の點がうゝいひもういが、志かし節義を重んじ山陽は硬骨を蔵して、蘇峰の上にあつて、較べ論ずべきものあり。世の評論家は遠慮なく行ゝの人と評するに、筆の蘇峰を及ばうへいは何故ぞ。

○浅草行ひの摩天閣玩具店をのぞくと廣がらしを撒つてゐる人形があるのを、婦人氣が生じ、衣と手人がゐるとうたがひなく北の人形のほけを完全ならしめんとして怒めるのは寧ろ吸茶の沙汰なり。況んや人が自分を大家と云ふことをば、恥を思ふが甚しいといふべきか、人動もすれば蘇峰を山陽に比す、類似の點がうゝいひもういが志かし節義を重んじ山陽は硬骨を蔵して、蘇峰の上にあつて、較べ論ずべきものあり。世の評論家は遠慮なく行ゝの人と評するに、筆の蘇峰を及ばうへいは何故ぞ。

○浅草行ひの摩天閣玩具店をのぞくと廣がらしを撒つてゐる人形があるのを、婦人氣が生じ、衣と手人がゐるとうたがひなく北の人形のほけ

を聽くことも出来さうだが、自分の鍋子の解釋をつけた。自分これを十七味を焼美し出くこあが其の擦いてある薬辛子形の容器に面白を入れてあるいたらものであらう。其の目容器さうに実子は赤く染めて、撮く人間の身体の芽しいあるから、人の目についたれあるその大きさのものである。当時の宣傳の一法も見ることが出来われる。当時の宣傳さも面白味がある。徳川期の物産さもなるので面白味がある。小西さうさ鍋屋の次に自分の解釋が或異つてゐるも以の其内紀して見ようと思ふ。

○種々の面例を買かーて田中儒が行法大帝の鍋信

を心の比喩と自分は伯を岩淵の五郎は訪ねた其の伯い鍋信を心の比喩と共に寺海さんと宮玉数枚を梨子地の文庫の蓋と買き面茶しく私に示さうと私も坐前国を離れて僧人も有見しに、彼が心の宮海面雪影とあの比と記臨さうが、各言面から撮影と伝つて有見すると為るよく出来ても中分が無つたの其後の法神宮の境内でも建設さうであるから、赤の記を誤人で見て、新和と心られたものは献上とを つて行者師光さあること をいつたの人うなる尼は建られの国に型で再出のものである

明治大帝の御尊像に就て

きのふ除幕式における…

田中光顯伯の謹話

【水戸發】十四日茨城縣大洗常陽明治記念館における明治大帝御尊像除幕式（七面參照）において田中光顯伯が挨拶にかへて話した物語は非常に興味あるものであつた、左にその要旨を掲げる

◇

明治大帝崩御の時、伯は宮内大臣として宮中牡丹の間で重臣と共に色々な會議をした末に『恐れ多いことであるが、先帝陛下は御寫眞が御きらひでいらせられ御寫眞を永久に御殿へすべきものがない、御遺體を御寫眞にとつて御置きしたい』といふ意見を述べたところがその言葉が發せられると共に一同シーンと水を打つたやうになつて可とも否ともいふものがない、その形勢が伯にはよくなかつたのでそのまゝ伯も黙ひて回答を求めなかつた

◇

後に鍋物師の岡崎雪聲がなんとかして明治天皇の御像を奉作したいが御寫眞等もないので困りきつて伯に相談を持ちかけたそれで侍從で永く明治大帝の側近に奉仕してその頃主馬頭をつとめてゐた藤波言長子に伯からまた相談をして來た

◇

藤波子のいふに私も曾て御遺骸を寫眞に撮りたいといふ田中伯の意見を知つて關らずも昭憲皇太后陛下に直々にこのことを御願ひ申し上げたことがあることが判つた、當時陛下は微臣の心中をお含み下さつて『それは誠に結構である』藤香川大夫に話して見よ』との御言葉だつたので喜んで直ちにこのことを香川大夫に聞いて見ると『先帝陛下は御寫眞を御撮りになる事が御嫌ひであらせられた、然るに何ぞや崩御あらせられて御叱り遊ばすことの能はぬをよい事にして御遺骸を撮し惑らするなどはもつての外の沙汰である』と烈火の如く叱り飛ばされた、仕方がないから再び皇太后陛下にその由言上すると陛下は『それは殘念である』と唯一言仰せられた事がある、自分も千秋の恨事として唯かゝる英明千古に比なき先帝の御姿を御殘し出來ぬのは遺憾であると思ひ更に御願ひ申して御願はそれは他御丈から御胴の廻りまで詳しく御拵入りの前に寸法をとつて置いたとの返事なので田中伯は非常に喜んでいろ〳〵相談の末、彫刻の淺邊長男氏がその任に當つて遂にこれをもととして御等身大の御銅像を奉作することゝなつた

◇

藤波子の御計りしたお身體の御穿を先づ原型としこれを侍從の人々や大奥につかへた女官達にも穿させたところ色々注意もあつて數百回訂正に訂正を加へ漸く先づこれならといふところまで行つたので謹んで皇太后陛下の御覽を仰いだところ『これは誠に先帝の御姿そのまゝである、結構である』とてしげ〳〵御覽の上『たゞ右の御眼の下に小さな黑子があられた、これを添へるやう』と御自ら小筆をとられて御記しになつた

◇

その上『どうも少し御いかつくらせられるやうである、もう少しやはらかい御氣色にせよ』との御言葉を賜はつたので御微笑とまでは行かないがそのお心持を出すやうに奉作して鑄型に入れ鑄さらひをしてゐる時に悲しくも皇太后陛下も御他界遊ばされ流石の伯も御銅像竣成を前にしてこれにはたゞ〳〵泣くのみであつた

◇

その後伯は山縣元帥にこの邊の事情を話すと元帥は進んでこの聖業を兩陛下及び皇太子殿下に奉獻するやうとの事なので伯が時の波多野宮相に會つてこの事をいひ『しかし明治大帝の御尊像はたゞ宮中の御奥に深く秘め置かれるばかりでは自分の意を達しない、せひとも人民何者も讃んで理する事の出來るところに奉置してもらひたい』と申し添へると波多野宮相もこれに同意し『それについては自分が責を負ふ』とまでいつた

◇

ところが伯があらかじめ案じた通り奉獻された御尊像は吹上御苑の奥深いところに置かれて誰一人拜されないので非常に不滿であり且波多野宮相の不信を責める事も今さら仕方がないので今回その原型による御尊像を新たに奉作してこれを靖王發祥の地水戸大洗の常陽明治記念館内に奉置して自由に奉拜せしめる事としたものである

あるこゝろがつ
ひに北の神像
を作るの伯の
苦辛一ハ伯自
身の口から語
られるから、自己分の
記るへ畏まる。
四月十五日記

前以
それ
が、未だ
る。殊に
これは
表であ
慕する
果、映畫
學の拒否
を拒否
我々が
か、之

ら見た文藝

出發

羽田義朗

映畫に對する場合、我々はこの前提から出發する。來る可き新時代の展囘は、映畫の新しき驅使によつて始まるのである。

云ふまでもなく、私の云はんとする主眼は日本映畫にある。だが、この日本映畫の立場背景をはつきりさせる爲めに、數片のトピックを持つて來たい。これらトピックは、單に際物的意味でなく、世界を跨ぐ映畫の輪劃を指示するものであるから……。

ヨーロッパ大戰が終了して以來十年以上になるが、アメリカ映畫は勿論の事ヨーロッパ映畫にも大戰を挿入したものが多い。ちよつとした大物になると、必ず大戰にクライマックス

資本主義が最高の程度にまで發達してゐる。千九百年代の特色であつた金融寡頭政治が今では殆んど金融獨裁政治にさへなつてゐる

日本主義から見た文藝

日本民族映畫の出發

羽田義朗

前以つて述べなければならぬ斷り書一つ。

それは——こんな事を書くのさへ馬鹿氣たやうに思はれるが、未だに映畫を低腦扱ひにする理解の乏しい人が時々ある。殊に、道德的な所謂日本主義者にそう云ふ人がよくある。これは、映畫が機械文化の結晶であり、アメリカニズムの代表であり、モボモガの中心であると云ふ意味から、彼等の思慕する東洋の精神文明と照合して生じるものらしい。その結果、映畫の否定と云ふ事になる。だが、我々の日本主義は科學の拒否でもなければ、文明沒落の謳歌でも勿論ない、科學を拒否せずにマスターする處に新時代性があるのだ。從つて我々が時代の尖端に立つて行くには、映畫を拒否するどころか、之を驅使して行かなければならない。

映畫に對する場合、我々はこの前提から出發する。來る可き新時代の展囘は、映畫の新しき驅使によつて始まるのである。

云ふまでもなく、私の云はんとする主眼は日本映畫にある。だが、この日本映畫の立場背景をはつきりさせる爲めに、數片のトピックを持つて來たい。これらトピックは、單に際物的意味でなく、世界を跨ぐ映畫の輪劃を指示するものであるから……。

ヨーロッパ大戰が終了して以來十年以上になるが、アメリカ映畫は勿論の事ヨーロッパ映畫にも大戰を挿入したものが多い。ちよつとした大物になると、必ず大戰にクライマックス

資本主義が最高の程度にまで發達してゐる。千九百年代の特色であつた金融寡頭政治が今では殆んど金融獨裁政治にさへなつてゐる

『新潟月報』

ところが伯があらかじめ探した通り奉戴された御神像は吹上御苑の奥深いところに置かれて誰一人拜されないので非常に不滿であり且波多野宮相の不信を責める事も今さら仕方がないので今回その厩鑿による御神像を新たに奉作してこれを新王發祥の地水戸大洗の常陽明治記念館内に奉置して自由に奉拜せしめる事としたものである

あるこころかつ
ぱ。北の神像
を作るの伯の
苦辛一ハ伯自
身の口から語
られてあるから、自己分の
記るハ略する。
四月十五日記

榛原製

を置いてゐる。宛も不戰條約とか軍縮會議とかの軍備制限事象に反比例して現はれるかのやうな有樣である。結局この戰爭物不斷の流行現象を顧じつめれば、世界の大衆が何んな理屈をさし置いても戰爭物を喜ぶと云ふ普通的心理の表白と、映畫の技能が戰爭の表現に於ては小說も戲曲も繪畫も及ばぬユニークな妙力を具有してゐると云ふ事になる。つまり、映畫は戰爭物に於て最適のキャパシチイを發揮し、大衆の新しき寵兒となつたのである。

だが、映畫の觸手は戰爭物完成だけに止らず、更に、新分野に延ばされた。原始生活の實寫映畫がそれである。

一昨年、中央アジアの遊牧民族の移動生活を撮影した「グラス」が公開されて以來、南洋の原始生活を寫した「チャング」「モアナ」、アフリカの猛獸狩を撮つた「ザンバ」など續々と發表されて、原始生活の實寫物と云ふ新傾向が現はれ始めた。この物珍しさは新鮮と奇矯を趁ふ都會人の目を驚かせたゞけではない、科學による自然の征服、引いては機械文化に現はれた原始復歸をも暗示した。單なる實寫が映畫それ自身を文明批判の高き位置に迄押し上げたのである。我々は、高層建築の鐵筋コンクリートの中で原始林に胞哮する猛獸を見、モガモボと伍して蠻人の舞踏を見た。こゝに、大衆娯樂以上に出た映畫の批判性を見ないわけにはゆかない。

次に、この原始民族生活に對する客觀的態度をとつてゐたカメラアイは、意識的に躍上つて、現社會世相裡中の民族生活に突入した。殊に、ユダア人に焦點が向けられた。斯くて民族鬪爭を主題とした映畫が生れた。ユダア人對アイルランド人の鬪爭を扱つた「長屋騷動成金の卷」「長屋騷動巴果の卷」「アビーの白ばら」ユダア人迫害を古代史にとつた「ベンハア」ユダア人、イタリー人、ドイツ人の軋轢を出した「新人の天地輝く」などがこれである。これらのアメリカ映畫は昨年から本年へかけて公開されたもので、就中「アビーの白ばら」は舞臺劇として五年間もニューヨークで評判され、三月初旬東京に出たもの。最も新しいトピックである。

これら映畫の內容は各民族性に根ざして、その鬪爭に始り融和に終つてゐるものが多い。從つて、中心が虐待に苦しむ民族生活の描寫とそれらの軋轢鬪爭を大アメリカ人として解決抱合しやうとするアメリカニズムの發露との二つに分れてゐる。アメリカ側としては、各民族を抱合して更に之をアメリカナイズせなければ止まぬ抱合同化性が看板なのであらうが、被差別、被虐待民族の民族意識の强調も强く現はれてゐる。ローマの貴族を粉碎してユダア人の勝利を叫ぶ「ベンハア」には、各國に散在するユダア人に對する民族意識の呼びかけ、白人に對する復讐の嘲笑がまざ〳〵と感じられた。更にスクリーン畫だけでなく、ユダア人の資本が多く投資されてゐるアメリカ映畫界裡に入れば、巷間唱へられる處のユダ

ア宣傳網を感知せざるを得ない。大映畫會社の社長、大映畫劇場の支配人中には、ユダア人が可成りにあると聞いてゐる。

ここに到つて、民族と映畫は密接な關係を構成した。このコムビネーションから二つの力を感じる。一は民族が映畫を造る力、他は大民族が諸民族を映畫によつて抱合する力である。前者は民族自決を後者は他民族平定統一を暗示する。日本に引き直して云へば、たとへば朝鮮がその獨立自主のために映畫を作る事は前者であり、朝鮮人とアイヌ人との軋轢を日本民族の力で解決する映畫は後者に當る。

斯くて、映畫は戰爭を、原始生活を、民族を獨特の表現形式で潑剌としかも大衆的に生かした。從來の藝術が企及し得なかつた方面に新內容と新表現を開拓したのである。換言すれば、これは現映畫の前衞線であり、世界の映畫界の輪劃を形作るもの、從つて、日本映畫に多くの示唆を投げるものである。

飜つて日本映畫に戻る。

日本映畫の雄飛には、以上の世界映畫の輪劃、水準線の上に立たねばならない事は云ふ迄もないが、尙その上に、日本映畫獨特の劍劇映畫の一大傾向を見逃してはならない。これこそ、外國映畫の民族物、戰爭物と對立し世界に誇る新藝術境ではあるまいか？劍の精神はわが民族獨自のもの、その藝術表現も亦無比である事は今更くり返へす要もないと思ふ。數年前阪妻の劍劇物「雄呂血」が偶然アメリカに輸出されて、名監督スタンバーグを驚かした話は幾度か語られ盡してゐる。最近のニュースによれば、アメリカ映畫會社でスペイン種の女優ドロレスデルリオの一團を率いて、日本の劍劇を映畫中に挿入のため來朝するとか云ふ。又、興味ある事は、ロシア崇拜のプロレタリア映畫論を振舞はす若きコムミニストの多くが、日本の劍劇をしきりに見物して快哉を叫んでゐると云ふ。遂に、劍劇映畫の靈力はコムミユスト得度の勤めをなしたものと云へやうではないか？、

故に、世界の映畫水準線に加ふるに我が劍劇映畫を以つてして、始めて日本映畫の形が明瞭となり、世界的な新しき目安が成立つのである。蓋し、映畫は世界の動きの尖端を走つて、しかも之を大衆化するところが特色である。この特色を眞先きに具象化するものこそ、三拍子も四拍子も揃つた？日本映畫でなくて何うしやうか？　又、この勇しき姿こそはとりも直さず日本民族主義に生きた日本映畫と云はなくてはならない。

更に、日本映畫の海外輸出、世界的雄飛に關して——。

これまでに、日本映畫の海外輸出は幾度か計劃され、多少は實現されたが、僅かに試驗的な企てに終り、海外在留邦人の目を喜ばすか、極く少數の外國人の好奇心を滿足させるに

——日本民族映畫の出發——

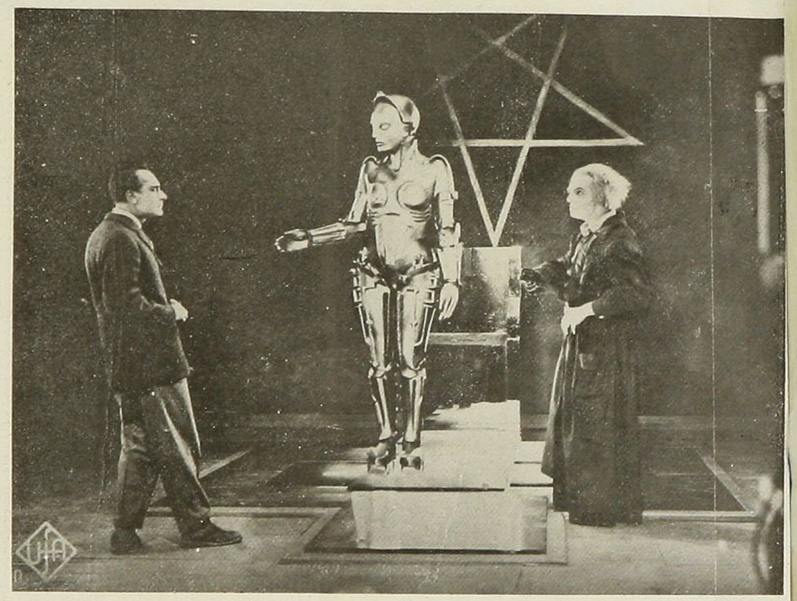
止つてゐた。最新のニュースとしては、日活の「忠次旅日記」「狂戀の女師匠」がフランスに輸出されたそうであるが、珍しき日本情調を一部のパリジャンに紹介する以上に効果を收め得られるか何うか？

單に日本映畫を輸出して、歐米人のオリエンタリズムを滿足させるだけならば、何んな物を出しても珍しい間はもてる。だが、それは骨董であつて、生きた作品にはならない。生きた民族的作品として、海外映畫市場にまで雄飛せしめるには、前述の水準線以上であらねばならない。即ち、水準以上にして、日本獨特の作品であることは、世界に於ても、獨特と云ふ事になる。こゝに到つて、世界的雄飛の機が與へられるのだ。

今までのアメリカの映畫の世界的洪水は巨大なる財力と共に作品が獨自の良さを持つてゐた事、ロシア映畫に對する世界の期待は新しきメカニツクの驅使による事ではあるまいか？獨自の良さを持つ事は何時も世界の中心となる事である。況して、日本民族の文化運動と呼應して起つたに於ては云ふ迄もない。

イギリス、イタリイドイツ等、ヨーロッパ諸國では、アメリカ映畫の侵入を防ぐために輸入制限法、上映映畫制限法を定めてゐる。これは國產映畫保護の國策である。然し、これでは僅かに外國物の侵入を防ぐ消極的手段であつて、自國映畫の積極的發展にはならない。結局、獨自のよさの創造が自國の映畫を解決すると共に、海外映畫界への進出を可能ならしめる事に歸着する。

日本の映畫人は金がないからよい物は出來ぬと云ふ。金さへかければよいものが出來ると云ふアメリカ映畫屋の跡を追つてゐるからである。金よりもより數倍、しかも藝術的に役立つ可き民族の力の潛在——之を日本の映畫人は忘れてはならない。ロシアへ歌舞伎が渡つた。これは日本演劇の世界的飛躍の口火であつた。又十九世紀末、浮世畫がフランスに渡つて印象派繪畫の出現を刺戟した事は悉知の事實である。但し日本藝術と云つても歌舞伎も浮世繪も共に過去の藝術である。この歌舞伎と浮世繪を現代及び將來に生かすもの——新時代の藝術として海外に躍らしめるものは、日本映畫にあると云はなければならない。あると云ふ理屈だけではない、これを日本民族の力で創造してゆかなくてはならないのだ。日本民族映畫の誕生出發はここにあると信じる。



名畫「メトロポリス」解說

岩崎 昶

Metropolis は七百萬馬克の製作費を要したと噂される。そのために獨乙映畫界の各方面に暗しい問題を捧き起した。フリッツ・ラングはそのためにウーファ社を辭しなければならなくなつた。

「Metropolis の中に、我々は、そのテーマの大壇さに於いても、その技術的實行に於ても、他の如何なる獨逸製品とも比較にならない大作を持つ」

キネマトグラーフ誌

「斯樣に壯大な畫面は嘗つて人の目によつて見られたことがなかつた。斯樣なカタストロフは未だ映畫の中に導入されたことがなかつた」

リヒト・ビルトビューネ誌

「映畫とは、——常に新らしきものを發見すること、常に現代精神に滿足を與へること、である。それ故に映畫の道にある立派な勞働者はすべて彼の以前の作品を凌駕しやうと努力する。靜止は退歩である。と云ふ格言が映畫ほど適切に妥當するものはない。フリッツ・ラングと私とは、我々の作品がこの意味で「改良」の一助となる樣に全力を注いだ」

脚色者テア・フォン・ハルボー女史が「メトロポリス」公開に際してその自信の程を物語つてゐる。

「Metropolis」はテア・フォン・ハルボー女史の小說である。最初フランクフルト繪入新聞に發表され、後に伯林の August Scherl から出版された。

それは空想的な科學的な未來記物語である。この地上の何處だかで、紀元二千年である。

資本主義が最高の程度にまで發達してゐる。千九百年代の特色であつた金融寡頭政治が今では殆んど金融獨裁政治にさへなつてゐる

飛行機・飛行機・飛行機！――汽車！電車！そして自動車！自動車！自動車！――見たまへ！あらゆる歡樂の母胎、メトロポリスを！

蒼茫たる天空を壓しつゝ鮮やかなスカイラインを劃つて聳立する大ビルディングの壯觀！そこでは飛行機はすでに一個のサイルにすぎません。窓から窓へ、ルーフからルーフへ世辭のいゝ「御用聞き」にすぎないのです。幾百層の大建築物をめぐる幾千階の路面。汽車も電車も自動車も宛ら疾風のスピードで空間を貫ぬきつゞけてあるのですがそれも殆んどおもちゃ位の存在でしかありません。

そこにはすでに勞働はありません。あるものは唯一「能率」と激しい「機械」の廻轉ばかりです。

地下に於けるエリックの生活が始りました。彼は多くの機械と勞働者に交つて、まざ〳〵と地下の忍苦の体驗を舐めたのでした。そして彼の若い血は地下の同胞のための正義感に燃へたちました。

「お父さん！我々人間は幾世紀間・黄金と鋼鐵の文明を建設して來ました。が、この文明が何を我々に與へてくれました？文明は人間を神に近づけましたか！」

熱情をこめてエリックは父を說くのでありましたが、マスターマン氏はナカ〳〵聞き入れる氣配を見せません。のみならず、エリックと同じ心持を持つジョセフを解雇して、ます〳〵その物質主義を助長しやうとするのです。

エリックとジョセフは、そこでいよ〳〵地下の生活に入つて行きました。

ジョン・マスターマン氏は、かくの如くにして自分の主義と主張を貫徹して行きましたが、尙それでも飽きたらず、一切の人間力を封じて機械力全能の世界を建設すべく大發明家ロトワング博士をして「人造人間」の創造に精進せしめつゝありましたが、つひにその

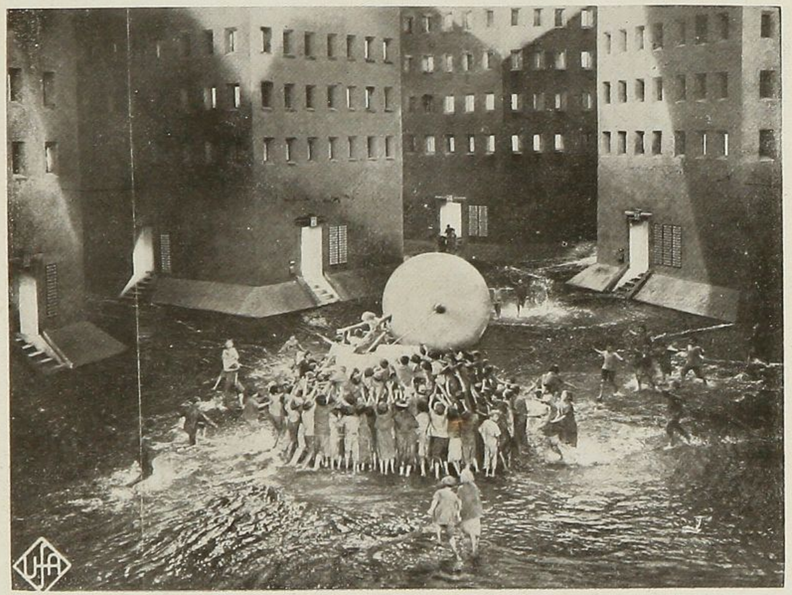
プロレタリアートは地上から全然驅逐されて了つて、地下の暗黑の中に住居してゐる。太陽も青空も大氣もすべて資本主義とその附屬物とに獨占されてゐる。文字通りの「上町」と「下町」とが形成されたわけだ。

地下では巨大な複雜な機械が日夜唸り聲を發して Metropolis の上町の住民のために物資を生產してゐる彼等は、無限大の摩天閣に住み、彼等の子弟を永遠の庭園に遊ばせ、自分達は快樂の殿堂ヨシワラに時間を過ごす。

この傳說めいた都市の中で生殺與奪の絕對權を握つてゐるのが財政王マスターマンである。それから起つて來る事件の皆々しい說明は避けるが、一口に言つて了へばマスターマンの一人息子が「下町」の娘メリーに戀する。勿論マスターマンは「下町」の娘との戀愛を許さない。そこで發明家のロートワングに命じて、メリーと寸分の相違もない一人の人造人間を作り上げさせる。

これから筋が開展して、下町から革命が起り、巨大な機械が資本主義の偶像として破壞され、人造人間メリーも焚殺の刑に遭ひ「下町」に洪水が起り、――要するに劇的にも量にも最も壯大で力强いクライマックスが繼續するのである。（中略）

マスターマンはアルフレット、アベル氏が演じてゐる。その秘書をフリッツ・ラスプ氏が、その息子を、グスターヴ・フローエリッヒ氏が演じてゐる。發明家のロートワングにはルドルフ・クラインロッゲ氏、メリーにはブリギッテヘルム嬢がそれ〴〵に扮してゐる。その中、フレーリッヒ氏とヘルム嬢ば・の映畫で初めて發見された掘り出し物である。



成功の日が近づきました。

「今」ト息で我々の造つた機械人間がほんとうの人間との區別がつかなくなりますよ。――その人間は魂がないばかりで全く普通の人間と同じことです。」

「魂といふものは結局ない方がいゝですよ。」

「ところでこの人間の名ですが。――」

「エフェシエンシー(能率)と名づけませう。」

飽までも能率萬能主義の人々です！

――その頃、地下街ではマリアのやうに美しいメリーが、その赤心で人々を愛撫するので勞働者の全部から女神のやうに崇められてゐました。

マスターマン氏はそれを知つて已の意圖を地下街に向つて遂行す、るためには、メリーの風貌を人造人間に扮飾せしめることが一番いゝことだと思ひつきました。そしてロトワング博士にそれを命じたのでした。

「女に形どつて作つた像が私の意志を職工に說いてゐる間、あなたのところに女を引きとめて置いて下さい！」

ロトワング博士の實驗室です。

鋭い白光です！たぎりたつフラスコです。妖しい液体がドロ〳〵と斉へ返つてゐます。ロトワング博士の異樣な姿が盛んに活動をしてゐます。――こゝのキャメラ・ワークに到つては、つひに前古未曾有です。到底、筆や言葉で盡せるものではありません。殘念乍ら之を畫面に見て戴く以外、凡そ如何なる博士學士もよく說明の出來るものではありますまい。絕大なる御期待をおかけ下さい。――と見る見るうちに、機械人間のグロテスクな姿は、大きな硝子管に嵌められたメリーの身体との電力の交流で、花恥かしい彼女の風貌に扮飾されてしまひました。寸分も違はぬ麗かな姿です。

實を計算に置くことを忘れてゐました。――即ち、人間が僭越にも魂なき人造人間などを造つた時！――といふ事實を。

統制のない人造人間は、その美しい姿にも似ず、地下街の人々に激越な調子で暴論を吐きはじめました。

「一体メトロポリスに注がれてゐる油汗は誰か流した油汗であるか一寧ろ機械は飢へさせて置け！」

人造人間の行動は炎の如く熱烈さを加へて行きます。

「さア！みんな！」

突如！激しい響音とゝもに地下街には盛んな火花が散亂しましたメトロポリスの心臟！大機關室が**爆發**したのです。

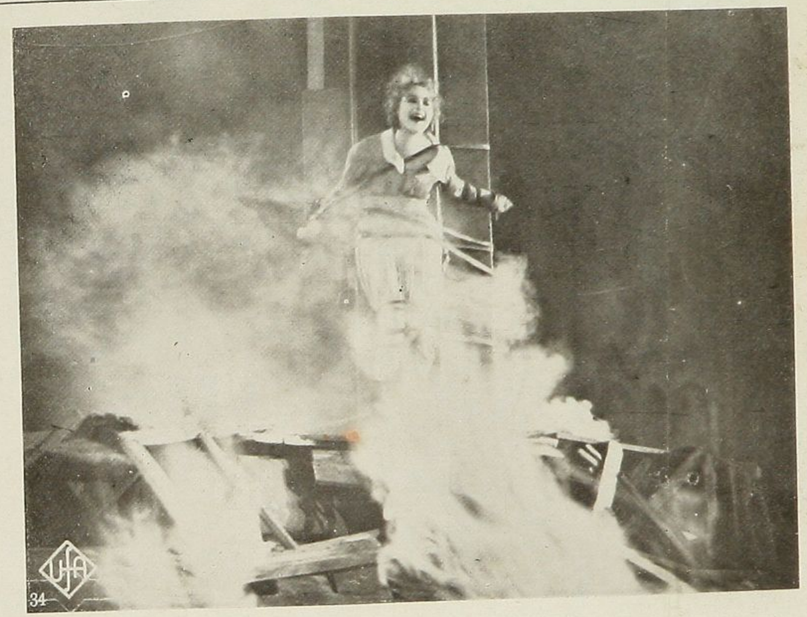
猛烈な勢ひで落下するエレベーター。鐵管の腹を裂いて奔出する濁水。――滔々たるその濁水は、今人類のひかりかゞやくエル・ドラドオに泥の化粧を刷かんとするのみならず、尊い人命をさへ舐めつくさんとするのです。逃げ惑ふ老幼。――凄慘なるこの光景の中に、人間メリーがロトワング博士の手を逃れて、まこと女神の姿で現れました。幼きもの達は、彼女とエリックとジョセフの手に一まづ救はれはしましたが、まだ地下街の騷擾は靜まりません。

マスターマン氏もこの騷擾の中にあつて息子の身上はナカ〳〵に氣がゝりでした。彼はエリックの安らかなる女神に念じつゝ、一方勞働者「九番」に、人造人間の顚末を話しました。

間もなく人造人間は勞働者の手に捕へられて焚殺の刑に處せられることになりました。火中に戀ろ鋼鐵の姿！勞働者達の驚異の中に人造人間は哄笑を續け乍ら焼けて行くのでした。

「世界を我々の手へ！メトロポリスを我々の手へ！」

人類の福祉を建設するものは人類であらねばなりません。輝やかしい「人間」の勞働が開始されました。メトロポリスは、いよ〳〵健康なる成長へ行きます。――



カメラの眼

メトロポリスに於けるカール・フロイント氏の眼の使ひ方

カール・フロイント氏は近代的な單眼鏡を、眉の上にのせて活歩する。

その眼鏡を通じて彼の眼に映されたものが、「最後の人」に於ける驚嘆すべき移動撮影であり、ちかくは「伯林都會交響楽」に於けるテンポ。美しい旋律さへその畫面から響いてくる緩急自在なスピードである。

カール・フロイント氏は、かくして、彼の單眼鏡によつて物象を隅なく眺め、そして、その映畫面に再現の藝術を創造したのである。彼の單眼鏡の映像は近代人のみが咀嚼し得る美しい魔法である。一面に普遍的なスプリを胞胎すると共に、一面には奇体な明日の謎を潜在させる。

所詮、カール・フロイント氏は映畫撮影に於ける世界唯一の巨人である。そして、その奇体な單眼鏡を縦横無盡に振翳す經驗を即に其等の作品に依つて得てゐる彼である。

この理由をして——

「メトロポリス」は絶對的驚異である。

テア・フオン・ハルヴオウ女史が百年後の世界を主題に扱つた小説を映畫作品に移すことは、このカール・フロイント氏の眼鏡を使はれば斯く堂々と出現しなかつたかも、或ひは、知れぬ。——それほどこの驚嘆すべき作品は、〃物象〃として眺めるには至難な形式であるからである。

「メトロポリス」の歴巻のその内容は即に紹介されてゐるから重復を避けて、もろに、カール・フロイント氏のすばらしい業蹟を讃へたいのである。

映畫——もしも、あなたが明日の映畫を語ろうとするなれば、先づ、話の的を彼に狙はなければならないのである。

そして、彼のカメラの眼を評價することが最も、アブ・ツ・ミニ

○此来書画を嗜ふことを忘れず、時に時に漫
無に紙を染めることあり、今年春田吳江の
雪景山水大幅を画き来るあり、こは曾て余の第一作なりしこと、吳江は此次年
帰後に来りし時、余未だ十四五位の年なりし
吳江の面影を知る、後の富山の人なる維新の雅
人なり右類を鋭丸に傳け其の痕当存せり。
画中もれ南宋北幅実に相違の点多しの
中、梅に鳴鶏と題する南時彩色の外に当北
彩なりしが故也、雪景山水土の風景なる余の
国絵にすきなるものの、他郷の人なる国画にもるか
え、余の郷土趣味を含むこと之れを嗜む幅い

恐らく四五年以前のことなるべし
○余昨日来遊し嗜ぶときは画冊を嗜む、●松浦武
四郎に倣ひ、唐宋人に対する書を寫さんと便りんか
為めなり、去月末遊墨を紙面に注ぎし時も一画
帳を携へ行き遊墨を寫さんとす画冊全部に相渡を
寫すに遊墨に従ひて揮毫を
あり、彼の有り、黄庭堅十数枚の画あり和歌
七言冊を携へ行くの妙果とす、元来文人日志の
互いに其墨跡を存せんとの為せるこの
所為なり、実に一種の習慣なれど往々後悔
あり、余其悔あるを知れやさるや也
○日清生命保険会社の次

為に自分を誇れば。其為に或酒席で会合した時
志きうま自分の考をのべるのを自分の不審に思つた
度々壊れた家を改造してまゝ新しいといふ
事、別に何の苦の変つた工夫があるでもなく、又
茶道の一切をば、何かあるのかと、笑き紛す
と、毎月の会費大抵の家へ客様の男が来
つてそこに待たせた世中が国芋屋や茶を
持つて来りするのが常の結果として主人
が出て来るのが慣例であるのに、あなたの高い会
費のベルを鳴すと世中が元次郎出るが名
刺が主人の二十五年迄する即刻に主人は会費の生
を迎へる。立ち乍ら茶を飲ませ、自分から世

複写製

間をすゝめる。又何人も吸ひすゝめる。机菓
の側に坐る茶具をすゝめる。あ
るいは茶をすゝめる。あ
あ又客様不を高の方に
と云ふ。自分は云ふ。此の
高の丸の丸を迎へる所と
接客と迎見する所。毎自分
丸と野の扱ひをする人は
主義で、世丸の割合
ミ度くもあるから衛生上
り、そこに机菓を据へ

まそこへ延く、五六人列坐することもあるが、其べて
て豆いて順番に用を片つける。自分のまい飯
魚かすのかく[illegible]か雑つも椿いぬ、式の中な
ハ[illegible]状をとゝのゝものがあり、ゝ書面帳にかけ
ちといふものがあつとうする。侍る机あまあり
所があるから豆さま弁する。相茶をすゝめる
一つ女中を呼つて炉つしいから、自分から
茶を飲人で出す。自分ハ玄関番もあり茶番
もあるが、実の意味何為生活をゝむからもあるが
如きであるから体裁振ることが出来ないからもある
と考へた。此月ハ云く成ると時代に変する建物
生活振りの制限した、アンナ云へる接もら

標原制

さこと[illegible]ものもあつて城府を
設けることもあります。と自分の食べ
生活をゝめた。自分の此活義ハ未いことも
るが、活変の注意を意と彼是云いんたのも
えんが初めてゝある。自分の接客のもてなし
畳一枚の大机があつて同者之者が整陣
座する自分の飯味にもする幅がかけてあるか
ら、錦繍である美人の趣味を理解
することが出来ます。これが何人の目をも惹く、一品豆腐
の書画を吸つた杉浦武四郎の書画とも云へ得ようと。書画ハもあります。いこのハ
文房四書時呉花瓶手六畳間紙画等が龍陳

にてある。床は世界の割合に大きいから、好んで大幅を
掛ける。雪舟は高さ高と濶さとあり、そして樂
は特産の高麗を掛けておく。ふる一家伝のように
も思し得る所と廣重の素朴義があるのだ。
客の多く隣家と雪とを目にする廣重の国内と思ふけれども、天地を
般と通用する所と微妙があるのである。
○此庭は国者銀協会の幹部員が森本氏を招
へて東京会館に宴を催した。森本が洋のと
様とし羅馬と(あるべき国際国者銀会議
を協会を代表して論ずることを伝聞し、共を
説しとの由其行を又)ん為めの招欲ひあつた。森

本は山形市の新紙のような庶出身である。出仕出身であるから田中光
顕伯と親交が厚く、自分は初めその会見で
あるから毎々田中伯らう言ひのいるを大いに
先方をも流しかけられたのだ。いろいろの話を交へ
親密の人となった。光顕は上海羅馬と我邦
が実義上の関係から互ひに往来したこと、殊に
九州の大名が船に少年数名を商校に使節
として羅馬へ出したことを思ひ出し、近
年契月が古いに比べ年使節の国に業者も
早稲田大学の学生の数一倍が今日森本が会議
臨むつき義しあれを携帯し行かれる

今度の興味をそそるは赤穂義士の縁故を尋ね、大使節一行のうち浜松をうたせ
る者道の弧味家ひ寄る所、京都
大学の新村出が京ハ、自分も実ハ内々あの
使節一行の事を研究したいと思つて
四年前中あらすじを東じたるを、
つとはなるもの中美の海、掘れから
出発ローマンスが無き能ハずと、
志を描いたるを、云ひ出すと、姉崎正治が
横から口を出してそこの京ハ市崎氏に浜
一ヨクそと、林柳川するのを一笑した。新村の
いつまハ出鱈目とかけべ面白ろいものが出来よ

うけんどもボツ〳〵事実を書いた日記の紀行文
ばかり出てくるのでどうも氣がさしても困ると
いふ。契月の後ハ最初の陸奥を抜式の使
節一行の任務を書くと今を起したのだから
ハ容易でないと傳ふ一帳を出る止ま
つたといふ話も出た。兎角あの史実ハ花ぬ
やか●の間ハ若者ものの苦惱もあり、小説
若くハ絵巻の材料としてハ面白ろ
かるのも無理ハない。

○後藤新平伯ハ頃し此。此人ハ自分と共に勤めひの
政治侯男の人であつたがいろ〳〵の事ハ交つた。私の
此人の名をかりたのハ私ハ事件と新聞
あつた。南

身分の差違等の立場もあつて北支伸を論じたこと
もある、顔を会いセしのの自分が衆議院議員も
何かの委員会で後藤の基隆の長官であつた
政府委員として出席して居られたのを捕まえて
か星と清かで豪放の補の人で平と喜ぶ愉快
な人であつた。後藤と因縁の深い賀田金三郎
か私と同姓の直次を養子にいと云つて
とか紀つて、直次の基隆の後藤から洋行を命
セられたのに、後藤のお蔭を深のもてみるの
で、後藤と賀田の家と交誼のあること、結婚の
時に後藤子爵が媒妁人となり、其関係から也
ばく後藤の命令の如く自分も也を運んだ

後藤の馬車に同乗して婚礼の式場と四時の時の車
中で後藤の強氏政策の一端を流し込んで少く
べき傾向があつた。日本稲田大学の創立の時、後藤が
内務大臣、早稲田を出資困難にあるが後藤と
自分の関係の交渉の仲介の仲間清説合と陽人で
くれたこともある。其際推薦状(校長)推薦の
のこと、伊藤公はんっとンの表ちゃん就きに
歴史を交へて多時語るを交へたこともあつた。
陸軍大臣の政治家の面のあるが、誤るを誤りとして就
着しないのであるが人気があつて、特と外交面
の切り方があつたので、伯爵寺内総理任昇つたことは役

のちの古義）城のうい笠である。　四月十八の記

後藤氏初めの主君であった板垣伯が岐阜で刺されたる時に彼の名古屋の高須藩であって急早く駆けつけた事があるとあって（注）

者は大のへたで、いつぞやあの銘々大四と今度は時代の話が出て、毒人の云ふない息子共は父が嘗て医者であったといくら少かもとも信じません。とあったが、之とそれでへたであったと云ふ者が上手であったとかしこ

ちょうどあるうと伯爵をかち得

○一名毒薬が若干須磨（注）みの為毒の者し

もの可ろうあったあるの

○家康と吳大徴の印二顆あり一顆官名を刻す、宮ゝて濱村花六らし之れを獲玄年陳列今ここ出陣に陰、足立勝村之れを見て云く、

元余の舊花ゝて花六ゝ刻意するこの宿かれのあり吳氏自刻ちんと、余之れを少きし服部耕石を以し、一回の墓ゝ後語をらん今日耕石招待、後語いすべて最安丈

文ここ云く

余久花氏印嘗刻意賜于濱村花六特入市時家丈瑯秀閣温雅恣商吳氏所用無疑矣三十年後再

獻之歎素命記眼福

昭和戊寅二月

時村岳士彦口口

○市田文学の史料編纂掛の書庫に太政官の編纂したる復古記の稿本あることは世へても知られたるが、その委曲は知ることもなくて過きたるに、今次内外書籍出版会社の之れを出版するこゝとなりたるに、豫約の募集を為すべき其の目録を見、且つ本書編纂の経歴を知ることを得た。本書は慶応大政奉還より王政復古の歎願に至る迄の経過を記したる一年

有半の歴史であるが、全篇三百七十巻の浩瀚なるものであり、其編纂は明治六年五月二十二日より始まり十六年八ヶ月の星霜を経て太政官修史館となり、内閣修史局を経て帝国大学編年史編纂掛となり、続いて長松幹氏を三代目の編纂掛となり、和漢輯録を主とし、帝国史料編纂掛に移り、川田剛氏等の校閲を経たものである。此の編纂中すい一回火災を蒙りて稿本を失つたこともあり、修史の方針が変じて古代より如何なることゝなつたか、編纂の要点は、歴史を来さんとするに当り、大政奉還の経過を大説し、以て大政の復古を説くに至る経過を大説したるものにして、一二複本は

あるひとの別記乃ち数多記ハ悉(一部略)の
校するのみをも世人の常見さるこの也今商十
五冊たりとも刊行の業也

四月十九日記

まのびなるべし。

○米國が國策を速やかなる真面目なるかの一例として石油政策の一端を挙げると、米国の如き大石油國なり。産額の豊富なることは免れかたく、前大統領リーシリンジの時は産額が減じて六年の後ならざれば復旧せざりしが、其後悉く復旧せんとす。そこで使用制限を一時緩和したが、其後悉く復旧へ衰切られても盛んなる涌出しとのこと。至涌に任じて産額の多きを誇る。傾きて流するからとて、今日は米国産業と制限する國策を執り、採掘をも制限して乾に採掘の権利を得て居ることなく許可数百件を取消し

出願中に許可し難き多くの件に就ては速に不許可の方針を執る事とし、流石に米国国策上不利と為れば既得権をも取消すことを敢てする。権利あり乍ら従来といふ如何なる及び難いことである。米国の為策は偶々

○余根守敬の書と愛す、往々賜ひ入る、家寶

若干の帳簿、今日赤鄙帳（ぼろ切れ）を繕ふ。
らし来る村山秋浦氏、世間異眠の人こゝ之
北帳の如き蒹葭なるものと笑ひ、鄙なるまゝ
しと余笑つて曰へ、直ちに壁に掲げ快と
叫ぶ、鄙の話に云く

流水落花春去也
枕来移樹鶯啼老

陳老人曰
落花流水春の光景の弾に霧（霧）の味あり。
利唐及び雅しとす、美しく也、家花に他に鄙帳の
也、家花に他に鄙帳の味あり。
四月廿二日記

（七）　G　第一千三百四千五百一号　聞

発見された宗達の大作

（第三種郵便物認可）　昭和四年四月二十三日（火曜日）　東京朝日

三百年間埋れた宗達の大作現はる

二大巨匠の大傑作と共に公開

前例を破る博物館

流行の浮世繪に先づ一指を

光琳、抱一も習つた新機軸

畫面に躍る五百人

流行し

騎手の

宗達特有の生氣

野口米次郎氏談

演劇博物館へ本社を經て寄附

沙翁劇塲管理委員から感謝を籠めた二十五磅

東京日日　四月廿三日

英國で有名なストラトフオード・オン・エヴオンの沙翁劇場管理委員はこの程わが社を通じて廿五ポンド（二百五十圓）を送り來り世界的沙翁研究家坪内逍遙博士の記念館である早大の演劇博物館へ寄付してくれと書簡を添へてある

…この美… しい海の彼方からの寄付の動機は沙翁劇場が大正十五年三月六日燒失し、米國から百萬ドルの寄付を得、七十五萬ドルの工費で再建されたがその基金募集當時、わが英文毎日、東京日日が廣く同劇場への寄付金をつのり故澤田正二郎氏の「コレオレーナス」の帝劇寄付興行や早大文學部教授學生の寄付百五十三圓六十錢等數千圓を集めて寄付したがその御禮心で今度の寄付をして來たものであるなほこの再建された

…劇場は… 昨年備廿九歳のエリザベス・スコット女史の設計になるもので今廿三日は沙翁の誕生日であり、同日より一週間この劇場で沙翁の傑作が連續上演され各國代表者の招待や列國旗が掲揚されることになつてゐる

○吉田松陰が高杉一番隊を創立の際其社を設け金子追懐録を求むるに記事未だ、この書に載せざりしことあるを以て言わべきことの改こゝにきそみるべしこれ（低上）現今さきいあが一つ為る、そんを社の時設ける條例と解んを刑辞とかくを入獄に際の吉田氏の載せし上先の原書等数通の原書が自分の経歴文書の内に収めたるものの思ひつき、此の書類の或る部分を写をつとつを出し、全文の宜しも掲載せん或い紀念とする事時を追懐する志料とする也初めの人を示しのもんのそんを載

すること、なりの如。いつもや追懐録をやの此折、此の文書のことを思ひ出し一方捜索しても獲なるこの如が昨年四月吉田氏の折見たしとのもある。明治十五年自分が廿四歳の折りの不祥文書ひ。今後人に見ると今昔の感ある。

乾坤方録の外に吉田氏の記事、社との約束書（一通）あり、余が入獄中俸給を毎月又東京父母の方（都合）、東京の旅費のうちより親戚に送りて帰京の出きこのあり

四月廿三日記

第四十四回春期大會
富士山麓盤石園の二日

四月二日沼津駅へ降り立つた両中の一行は国醇會を富士山麓の原田の御田中翁の別荘に催す会員の面々である。斎藤幹事は前日から原田に準備員として来り居て一行を出迎ひられたのだ大型十五人乗の自働車は東海道の舊街道の原鈴川を疾走する思ひまきけぬ沿道帶の桃林は今を盛りと咲めきあつて春和に恍惚の情の入るを賞しつゝ盤石園の門内に列着した門前既に岩を咬む水勢奔逸水の盤石園と翁の称せられしもさこそと清冽の気に撲たれた數奇を凝せる浴場に入れば泉湯を仕立てられ旅の疲れを一洗した浴後両者息みたれはとて園内逍遥瑞巌亭の見晴に甘酒の饗を受け田中翁の案内にて園内一巡池中に鏡石といふがある山栗判官照手姫化粧の石と言ひ伝へられ是より園名ときられし由判官は此所に名馬鬼芦毛を求ひ金馬を葬つて馬頭觀音を勸請して一宇を建立したるが今に在しこの園と丘一重に接したるなど史実を翁自ら語られ興深く覚へ内元此園も稲田なりしを翁が自ら庭作して池を穿ち丘の高低を利用して滝を作り樹木の配置佳吳となく心を篭められ一かとり名園と現出してより数星霜風致寂を生じたる味ひ一同嘆賞惜かず殊に湧泉の豊富なるこの別荘が泉湧て清泉流れ一方は田村はこの流れを汲んで飲料れ

ゝ例より設けの一室に国醇會を開く香取氏の講話神武天皇祭に因みて開始されたる今氏は今回其専門方面の研究の為に朝鮮支那巡遊の途に上られる其途中を立寄られたりて国醇會例会を振出しに万里の征途に門立たれるの元から一同も特殊の興味を以て耳を傾けた氏は其職務柄から金石学採鉱冶金及古史考古学の多方面の引證を取つて神武帝の御事蹟を語られたれも有益であつた聽て配膳を移り田中翁が心を篭められ一かとり名園と現出してより命草翁好みの耳すり身延山麓の芝川海苔富士山麓の自然薯の山かけ豆腐なんでに一同舌鼓を打つ橋屋圓藏君の「奉加帳」の長講一席の落語に並居る人々の腹の皮を撚らせて一つも此の「くすぐり」のない話術今の若手に珍らしい愉い程な味を見せた漫談快話は會員の口を ついつほとはしる其中清興として国醇舞踊数番あるなで夜の更くるを忘れた宴を撤して豫て設けられたる板の間に案内されて床に就つた翌朝は前日の雨に引かへ春日和のさやかに明け初めた同勢十数人枕を並へた床から珍談交談の流さえさめる前夜も夜半三時頃迄床なかつた位はずんだ由 江戸ッ気気質は駿洲まで発揮されて朝湯の用意調ひたりとの知らせ流石翁の行届た心配からと一同勇んで浴みて一つ朝餉の饗をうけ今日園内の小流に曲水の宴を張るべく勧て田中翁去年拝受

された恩賜の銀盃を細流の上午より流され神武天皇祭の佳節に天
上の甘露の盃を頒ちうけはやと人々最かに岸辺に立並び一盃つゝを
頂戴せるに仰ぎ読いて朱盃寛流に迄ひ流れ来るを受りては返
外交ち特に翁の心入れまて下戸黨の為めとて志るき碗を送へて饗なさ
れたか曲水は不似合とて餞計の転覆と云ふ惨状下戸黨顔色な
く花ト一團子流に鍋から直々と云ふ不風流を演せしも時に取つ
ての興であつた。是も翁の趣向まてさの張の料理人に焼かせて鮮かな
掬ふに任せ喰たゝは是を掬て出張の料理人に焼かせて鮮かな
処に賞翫させしと云ふ事一同他愛なく「多ゝ綱」を手にして供ま
還つて掬ふ態稚気漫にて大悦びてあつたおでんやは田中翁の膳
奠て江戸前の調理方とさつけ志るきも翁の指図に江戸前の味
を見せつれも吉原町から特に出張させたる歓待振りあつた午餐に
翁自慢の筍飯の饗応を受けて曲水の宴を了し香取氏正午過る頃
出発の途に就くべく会員一同鑑石園門前に送りまて共行を仕るーた
午後は三時近園遊会図藏君盛に浩躍し植村瑞洋氏の曲藝国
性舞踊さては会員の向々の隠し藝まてすつんて興盡くるを知らず
三時室内に引上げ会員一同田中翁感謝を述へ惜しくも園園を
辞し東京駅へは夜の八時着一同散ーた

田中智学翁　鳥谷幡山氏　香取秀真氏
高須芳次郎氏　武田雪堂氏　永見德太郎氏
斎藤富ト氏　石川岩三郎氏　篠田幹事
河野幹事　斎藤幹事　橋屋図藏氏
（未寅）高田恵忍氏　（幹旋方）浅野黨三郎氏
鷲塚蓮太郎氏　（幹旋方）渡辺黎鶴氏

四月二十二日

國醇會
幹事

会員名簿
この会記をとゝめおく

○此頃い栗城へ行き、庭番六本木の鶏屋大和屋と聞いた栗城へ内藤久蔵を尋ねし処、今日私が出席しようへと申されの性質がうるさいと云ふ事を聞て帰すと私を追ひ出す、此れも私の世話なれとも私の家の家に成る者ローマンスがあるから、私は此の家の若い未亡人と云ふ事を知ったとあで放逐された。婚男が放蕩である事を知て林氏遺産をうばひ取る。そこで此の婚男の叔父で高名人が家を治めるのが此の放蕩息子が去唄を習つてゐる残像がある。稀書屋六四郎のすべて数つの内き六四郎の養子に寄の家へ行き、とかくと共家に宿泊すること

も出来。孤かのつて谷足付の中間在三河の屋敷年の若い息子が死んで七日経ったへ内の未亡人が下屋敷迄番と不義をしたとふので家を追へん、実家へも帰り難く放れか下屋敷の男と共三四日天麩羅の屋を始めたが後すへ義者とうつて柳橋の現のれ。義者の名い雅がお絹影と云ふ、それが、いつしか大和屋の息子と関係を生じたのい不思議な因縁である。此の梨影の銀屋の娘でちつて、男女共に銀子に来いアザのやうなものあるゆへ、鏡を針でさす報ひであらうと云のんとある。此女も去唄の義女の屋敷の六寿の家へ出へすると内、六寿と始と

通することいなつて梨影の情夫いまし六寿の
妻と密通ぬ仲なりなる六寿のうあの
六寿の妻比の一人の娘で六寿との間なる子供も
あるなり性来嫉妬で一夫を守ることが出来ず
兎角の評もあつたが六寿と大和田の息子との
間なめる折柄が行はれて六寿が二階で梨影
を抱し、六寿の妻の階下で大和田と枕を並
べるといふ乱倫き夫婦撮を生じ六寿は
面目なさる一時義憤を退へ、ところで驚い
たことに多くの人の知る所となる別頭六寿の
雑像の身となり六寿の妻は大和田の情婦庵
を嫁ぐといふ大団円となる今の別荘してみる

榛原蔵

といふが六寿のいふあの妻の一向を改まらず
大和田の息子もシレこと共を感じ一人今更
去られもせず息をついて身をかこつてみると
いふ梨影の情婦庵を早く自見切りをつけ
てもうく金をもつてみると誰かくこうれた南
家のお家騒動と共に元金を條件が旦伯も
長うひいきいかと任命の一人と情しと
○別刻を以つて名彫りもる内幕仲まる月
の天長節をもし大根今彼と自化三十歳
の長治を考すこと今の来訪あり敏枝
の写真を贈ると中る平田勤夫の写
さい西側面面らると掲げる二枚あるこん

横原製

尤も余の知る所にて一枚をこゝに収む、平田八蔵庵主の士なれど徳川氏が薩摩藩の命令を奉ずの流れ汲む士なり、薩摩と合し居る時二十を賞し居るこの地の雄士なり、八莫大の資を回家し、薩摩の為を以てすると雖も迷惑し居るとなり、過毫幕府にこの雄士を命じて薩摩の力を弱めんとし居るを解さんとなる、南的平田の辛苦、薩府の士八十餘名、文年かの後に平田の自刎し、陸奥も殉して悲惨の最後を遂げ、幕府時代の大椿なりしなり、赤穂の義士の播磨にあるの

○昨夜の協会の幕近き荒木来一句を
拙いて、世界早画（ママ）り競走（ママ）世界のレコード
を破つ比（ママ）紅を三時間飛ばして
の面白味も感じた。昨年一時事新報が北海
を企てた時に荒木が東方松井某が西方から
として入選した比が月桂冠に荒木を帰して世
界的の記録を破り三十三日と十四時間で一周
を果した。往来の池袋に五米利加のシヤンス
といふが三十五日二十一時間で一周した。世界最
早やいのである。荒木は能率顧問技師で三
十七八位な度さ形の荒くまである。恐らく技
師で現在的事業者が、身体が軽小

くの外国語に通じてゐるまで成功したのであらう。
斯る熟考を最も大切な準備の旅程を研究することで、捷路を選ぶの勿論は目的
地への道を選ぶ。船や機関車、飛行機などの連絡を若しも悪しくしたら無駄の時間のないやうにせねばならぬ。地の利
豊かな人口を備へた長い海岸線の無い限り本の大使公使領事などの依頼を
蒙し置くなどの準備もある。荒木の出発前一ヶ月の準備時間があつても僅うる法般の
調査を遂げたとのあるを。勿論忙しい旅で

旅行に過つことの唯一回あるのみといふ。
谷間の同胞やスポーツ流行の人々のところの回りも
歓迎する有様であるけれども歓迎とは
とみる時間が気とともに、元行機から降りる
と直ちに汽車に乗ることとなる。弾丸を飛ぶ
ように進行したが、汽車の時刻と変更が
あつたりしたり、すごつきを生じ路程に速度の
法を講じたことも多く、気苦のことで旅程
の内のかのつとみるべき意味を孤島である思セねば
ならないことが起つたが旅券を共同名が無
いのと、面倒が生じたことも多く、そんなポーランド
でやつと公使を繋つてそこを切りぬけたといふ

ある。ぬかるみ時々に成る大市の暮し、そこの市長を訪問ままも面倒があつて、乃ち拂曉着した
筆で有る市長を無理に面会を求め、弟、武、我
公使を市長宅に睡眠時中、雨戸を求めて
することも超つた。時々手紙がなへのと
から、公使にも市長にも情らく接見したのハス
ポーツのお蔭と滑稽極ハ乗
り物の都合で小半の神社へハセ出る事もあつても
あの見物も出来たといふ、元行機の便利
のある所の話こんこ賛う、一路三千哩も飛ん
其間を乗のサンドウエッチ四枚を食らひ
過きぬ、もポッケットの前物袋を探くと

れを時々口に入れとゝろてみる。杉井と生今子との
ハマドリッドで元行機で行きこ男つとそうに
餐宴が狂つて絶対絶命の寸前をやつて異起
しとこともある。そこで
時々時々の移殺死から日本の九州へ着した
危険と特を言信かあつたが、祖国の元行機
と乗らぬとなつてハ、徹底を缺くと考へて
俺て乗つて神戸に行つた。四月廿日
すべて言ふ般の競争の兎角
ハ他原で酒を喰ふ、暴風雨の
を失しなる他原も持ふ
重ちるものや、

風の人間の特徴を缺くことがある。蕪木などハ丸々(まるまる)南の人であるらしい。洋行や靴や
樹草品にある一二のものを除きてはと國
産のみ計りを用ヘルとあれども、社会問題の解
評判がよかつたと云ふ。明治新聞の当時
計るとい三十三の間を僅に五分の差を
生ずるに過ぎなかつたと云ふのである。
○北原文那で孤文の墓を見又宮西並びレニンの
墓を見た人の話しを聞くに何れも宏壮のもので
孤文のは大理石で低く前面を金屏の扉
のついた戸があつて、うんから棺を入れるやうなな
つてゐる。文那でいい墓を作るく風もあるのだ。

を作く為める南部の用意があり、歴代天子
の陵の様なものだ。土饅頭の所が全部
大理石だとか。レニンのいた地下室にガラス張り
の大きな棺があり、遺骸を透して
見さしめるやうなものである。レニンの遺骸
は四時間目ごとに取かへられるこうなく
腐らない。多くの人
やうに見へたと。ツメへたいくら共産主義
でも、デモクラテックでもも、墓だけは振つてゐる
業績の為す業だ。
○入浴醫師と同席した時の話。畢丸の話が出
た、左右両丸ある人の大小があるやうだがといふと

入浴の設備を善くし朝鮮人処けハたたた
ゑ大ぶかるへ。鮮人ゑ金玉均といふ人がゐ
るでハないかと云ふて笑ハせた。
○陰日の到風ゑ市中を歩いてゐると、一美
人が風で衣服のすそを煽られ、肌を露
すの氣味ゑ、赤きりゑまきを二巻す
と、ホーく頭を下けた殺那ゑ繋がかり
りと落ちて、そんが風ゑ乗ハれて飛ふといふ
騒ぎ。北婦人ハ容貌の美と似す、自然
頭に飾ハ冠を冠つて来たのだ
あつた。風ハ無心といふく、悪戯を好む
この比、婦人の祝面を暴露せんとする、実ん

を吹元して復雛もど
きの悪戯を試みて行人ゑ笑資を與ふ
○女性の美ハ眼ゑ存りとさん、西洋ハ眼が
恋愛の誘惑の具ハ眼であるのが、直接下着
して足ゑ移つた。女性もストッキングや靴
ゑ力をハ注めて、足の形や長さの整ハ
ハのを誇りとした。街頭ゑ闊歩するやう
ゑなった。趣味のハ善ハ善しいかなれ
○ラジオのアナウンサーハ外国ゑ男子が音
らすして女性を用ひ、とも多へとが何故ハあら
うか、女性ゑふさはしいことハ世をもしてアナウン
スさせた方がよさそうなことである。日本ハ

朝の駄菓のことや育児の事などハ女子が故之
すこし限ることゝ
といふのび止めとか、女子の故之を受けがとるい
るいといふのびいもあらうか。
○銀座の紙物屋と三宝のつて見ると玩具（こま
かい銀細工の品の下ケ物がいろ〳〵あつた外
だの鳥居だの弐品の弐蟹だの船だの烟管入れだ
等し自分の小頃時代にこの頃又ゝあが鉛び
心え、えゝ四貫形の煎餅の中へ入れてがラ
くと鳴いて、中供を喜ハしたものである。他に物
屋であつたのも此数であるが、異ちう所ハ紙製
でとれるも環かついてゐて、時計や

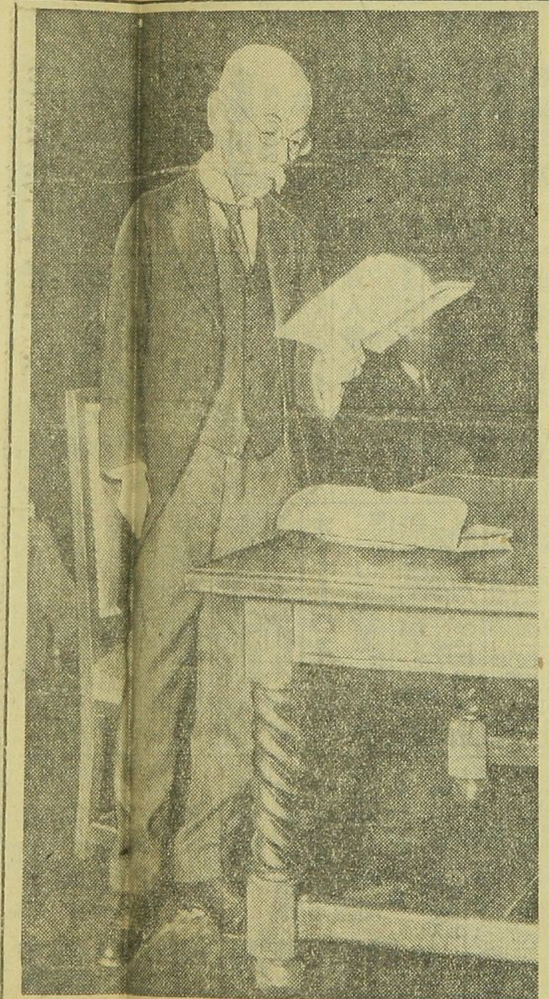
着くやうなうつ
こゝ頃へすこし頃へ見ると烟具の
さしの土瓶の小間がすつと抜けて中へ紙を
の烟管が現れて来た。形ばかりのまるびなる
漸く氣がつき、烟管入も小くびあらうと、爪び
開けると、煙草があつて、チヤントと開く、中へ
何か入つてゐるので、出して見ると、紙巻の
寒か三個出た。此烟管入ハ情僅か二分
位しかない。金色の金具まで巻してある。
侯の廉ちゝものは此校のものがあるかとあるが
も思ふに。コンナ小細工ハ日本人でなければ出来
ない業である。此〳〵こん苦しの脳をしいて

が苗蒔術の最後の名誉であると小局架を納めた。

○歌沢は明治の末年に再興の隆運を顧慮して稽古の防止計画をやつてみるが、第二等四位なるノルウエー スウ井デン・デンマルクの三国、白耳義、ポルトガル、明治の日本を考へて、赤色を帯びた白国の旗を掲げ、露西亜、伯国を合せ、彼土に就て実験の祝賀や研究とさるものの如き、切つて効を奏し、最初留学の一年後に赤色といくらか流やのまるけれども第二年まで大いの落ちぎ、第三年まで全く止を感ずるまでもあるとこれ、明治の日本ならびに元合の研究もあり、皮肉の如き表化を説き、皮肉は徒らに悲しき、矢張り歌沢の本領の為すべき歌ふべきである。四月市六の○桜内(梁)の聊本新法は有名なものであるが公衆が聴くことは今度漸次後援会の俗しい始めであらう、前年法雅の朝後を早稲田大学の舞大講堂でやつた時は去るの聴衆があつたとのが多分その半分の多数であつたであらう。自人のとなれば歌沢の産法の新しい花を沢山の聴衆が聴きに来たのは三時間以上連続したのを聴いたのは初めである。十年程前に聴いた時よりも新鮮ここまでうつれ。

醉はされた名調子

久し振り大隈會館に現はれて 逍遙博士の脚本朗讀



◇久し振りで逍遙坪内博士の有名な脚本朗讀が行はれた、豫定の如く早稲田大學演劇博物館後援のため二十七日午後一時から大隈會館で――、博士の脚本朗讀は非常な有名でありながらこれまでほとんど一般には公開されなかつた、それが今回は一般に公開されるといふのでこの會は文壇劇壇の間に素晴しい人氣を集め二千の座席は全部割切れといふ盛況であつた

◇

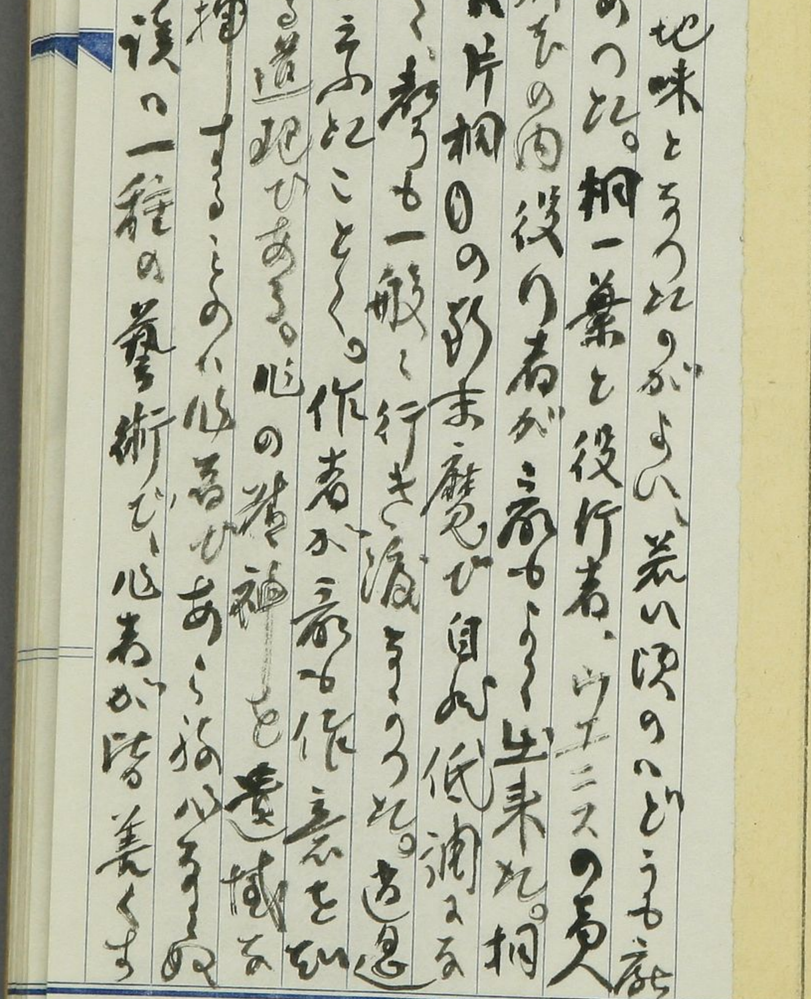
濃緑のカーテンを背景に大きな植木鉢、その他には何の裝飾もない清そな演壇に鶴の如きさうくを運んだ博士は『この脚本朗讀といふものが更に鍛練を重ねて行つた曉には一つの藝術となり得るものであるかどうか、皆さんの判斷を願ひたい』といふ心持ちを述べて赤皮の折かばんから無雜作に台本をとりだしてすぐとりかゝつた

◇

最初は博士の名作として世に歌はれてゐる「桐一葉」の片桐助の場と長良堤の場である、七十一歳の老博士の喉から不思議な美聲が流れる、おごりとしつとにのたうちまはる四十代の淀君の聲老臣孤忠の片桐の聲、大野道軒の聲、まるで歌舞伎の大舞台を見てゐるかの如く、高低抑揚自由自在の台詞回しには眞作の氣分、情調が遺憾なく展開されて、滿場醉へるが如くその聲にみせられた

◇

終つて小憩の後、博士は更に「役の行者」の六幕目、山上ヶ嶽岩窟の場を朗讀、最後は「ヴエニスの商人」の法廷の場で前後四時間、博士の聲には少しの疲勞もなく、快いリヅムに二千の聽衆を醉はせた、散會は午後五時



志かし地味とそうたのがよい、若い頃のハどうも高味があつた。桐一葉と役行者、ウエニスの商人の三脚本の内役行者が高もよく出来た。桐一葉の片桐助の場も自分は低調なる方だ。しかし自分は一般に行き渡らうとの意思が自らそうたことくの作者が高も作意を出つてゐる意思ひある。此の作福も意域なく出ひ出するものいい心者ひあらゆる心をもつて朗読の一種の藝術で心者が陪義くす

るものも無い。道遥こゝの静寂かよく上の銀
鍊があつて、各人の働人に語るのごとく、ある
る背押しも毫も保束度なと淫みの日かあ。
えんを模倣才があるのでい婦人の者、高位の私
ずえんく読みうけることが出来る。此のアー
トは聊も心右を動かす無い業である。道
遥はおあく前のから下痢かつゝき度
器を見くこゝろとつき約一
時間一語のみも口をもず、美るる三聊ちも
後の事なれ復藤右を解かしとのへ実と
動るいた。荒し滑稽交うの世話相言の聊ち
を後ようしたら、更らに聽衆の日一倍のもと感

しとしてあらう。兎に角二のよう的る聽衆が
弱る真面目に一の笑を誘ふ迄終つたのは国民試験
保し道遥が公衆を惹つけ聽衆の事のもあつた。
つて三聊を朗読する事は義務なる。よりて直
ぐ無いもあらう。今後乎乎
を催し二のを務る此紀を終る

宅なり奥庭に千年の松あり淡水の小池あり内に鯉、鮒、金魚を放養す閑雅幽邃蘚苔岩を蝕し千古の家屋と相俟て古色蒼然たり裏門を出づれば突たる神樂岩あり天然巖にして其形狀恰も獅子に似たるより神樂岩と命名せしものならん眺望快濶脚下は波浪白雪を飛ばし夏尚寒き感あり。古昔日蓮上人旭を拜せし處にして遙に小湊誕生寺と相對す前面渺茫際涯なき蒼海は則ち太平洋にして遠く亞米利加洲に達す偉人の修養地たる問はずして知るべきなり下れば頼朝公隠窟あり間口三間奥行七間の天然洞窟にして治承四年石橋山より遁れ來りて修養せし處なり福女稲荷を祀る毎年初午には善男善女の參拜する者千を以て數ふ社前の馬蹄石は木村太夫崎海岸に在りて昔同所に名馬を產し太主驪と名付け頼朝公の愛馬となり偶〻石に其蹄痕を止めしものなりと傳ふ其上高所の一角は維新前黑船渡來の當時島主砲臺を築き藩に提供し時の警護に充てたる所にして幼稚なる砲門の今尚ほ存在するも笑止なり。

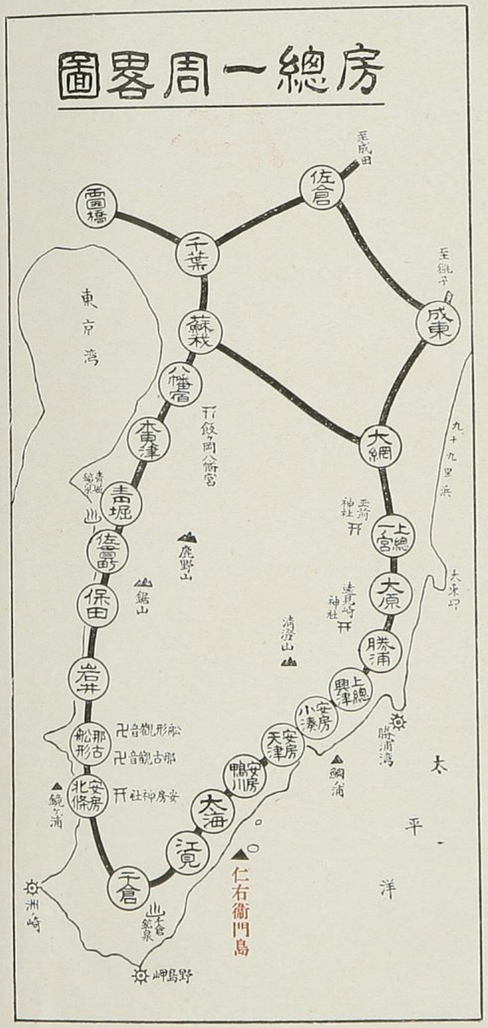
歸路復た表門を出て石段の中腹より右折西端に至らんとせば其途中に碑あり。

海暮れて鴨の聲ほのかに白し　　はせを

其又先に蓬島辨財天の祠あり玆に山階宮藤麿王殿下御手植の松あり此祠八月十五日の例祭には附近の漁夫來りて大漁を祈願す。

西端より瞰下すれば龜石と云ふ奇岩を見るべし甸匐擡頭の狀恰も大龜の如く天然の奇又一顧の値あり此の處南は安房南端白濱より東は上總勝浦を見渡し遠近壯大なる眺望島中第一とす。

西端に運べば屏風岩に波除不動尊を見るべく又岩石を堀鑿して造りたる數個の活洲(いけす)あり鮑(あわび)、螺蟶(さざえ)の附着するあり伊勢蝦(いせえび)の偕老同穴も面白く餌を投與すれば鯛、鰍の潑溂として跳るあり人をして思はず賞嘆の聲を



仁右衛門島誌

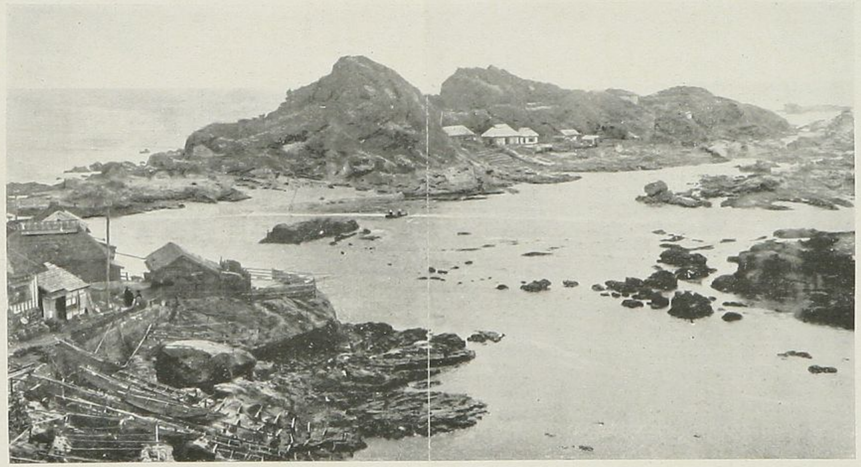
島の由來　千葉縣安房郡太海村地先に陸を距ること二町周圍約三十町の島あり仁右衛門島と云ふ太島また蓬島と云ふ島上一戸を構ふる平野仁右衛門は本島の所有者なり祖先仁右衛門の始めて此島を開きたる年代は遼遠にして詳かならざれども治承年間源頼朝公此島に渡來の時既に仁右衛門なるもの居住せしことより考ふれば其舊家なること知るべきなり家憲により代々島主は仁右衛門を襲名し連綿今日に到れり元祿十六年十一月關東大海嘯あり本島も亦其惨害を被り財寶多く流失し舊記の微すべきもの同時に散逸せるを以て遠く往古に潮り詳細を繹ること難し。

口碑に就て稽るに日蓮上人、芭蕉翁其他偉人名士の杖を本島に曳けるもの尠からず其來遊者の詩歌數首を軸めて末尾に掲ぐ。

世人の知る如く日蓮上人は貞應元年當國小湊に生れ當地方に於て始めて法華經を唱導し盛に布教したり時の島主等亦日蓮の德を慕ふこと切にして從來信仰し來りたる天台宗を別家某に讓り新たに現れたる法華宗に歸依し菩提所を小松原山鏡忍寺に革めたり。

古き住宅　元祿海嘯の翌年居を現在の處に移したるも其建築は概ね當時流失を免れたる殘留材を以て改築せしものなれば南天の床縁、桑の天井、栂の柱等頗る古色を帶び其光澤漆よりも黒し欅の鏡戸は鉋の發明あらざりし時の作なるを以て手斧削りの元の儘なり床柱は南天の自然木なりしが多年の間修繕の都度腐蝕の部分を削り去りて今は床縁となり存在す天井は桑板にして障子は神代杉なり母屋間口九間奥行六間の瓦葺平屋と外に倉庫物置數軒あり大正十二年九月の大地震には各地破壞人畜死傷の惨狀を極めたるも本島は岩磐强固の爲め庭内の燈籠倒れ家屋の壁を振落したるに止まれり。

仁右衛門島全景



太海驛ヨリ約六丁——渡船距離約二丁
鴨川驛ヨリ自動車便アリ

島主の特權及家賣　昔源頼朝兵を伊豆に擧げ石橋山の戰に於て利あらず當國に遁れ來り本島内に暫く英氣を養はれたる時島主仁右衛門能く公を禮遇し後公覇業を鎌倉に創むるに及び功により附近の海面より漁業運上を徴收するの特權を附與せられ續て德川幕府に及び明治年迄に到りしが幕府の政權奉還と共に此恩典消滅に歸し獨り採鮑業のみ今尚專有權を存續せり。

島主は代々苗字帶刀御免を蒙り新年には江戸丸の内に登城し幕府の年賀に參列して謁見を得たり家寶として存在せるものは頼朝公より拜領の伽羅枕と古代より傳はりし陶磁器塗物等にして刀劍書畫類は海嘯の際汐入りとなり保存に堪へざりしを遺憾とす。

氣候植物　冬季は北風多きも黒潮の暖流岸を洗ふを以て頗る暖く絶えて霜雪を見ることなし夏季は清風徐ろに大洋の冷氣を齎らし苦熱を知らず之れを東京に比すれば寒暑とも華氏八度の差あり。

庭内に大蘇鐵と老松あり礁确なる土地に生じ常に海洋より吹き來る强風と戰ひ千年の歳月を經てます〳〵綠葉の繁茂せるは全く氣候の關係に因るなるべし蔬菜類に至りても成育頗る宜しく四時厨房に供して餘りあり植物の主なるものは松、茅萸、ドベラ、モツコク、百合、サフラン、萱草、オキザリス、蓬、濱菜、水仙、野蕗等にして四季花の絶ゆることなし又神代神前に捧げしといふ濱木綿は馥郁として香を放ち金銀針茄子なるもの野生繁茂し曉秋果々赤實を結ぶ保護植物の一なり蓬草は濱菜と共に繁茂す濱菜は能く胃腸病を治すと云へり鮑は本島の特産物にして生の儘東京市場へ輸出し又干鮑とすれば特種の風味を有するを以て土産物として賞美する處なり。

渡船及遊覽順序　渡船は日出より日沒まで絶えず發着せるを以て何時にても隨意に島内を遊覽することを得べし島に上陸せば先づ石段を登りて門を入る四圍石垣を繞らし宛然古代の城廓の如きもの則ち當主の邸宅なり奥庭に千年の松あり淡水の小池あり内に鯉、鮒、金魚を放養す閑雅幽邃蘚苔岩を蝕し千古の家屋と相俟て古色蒼然たり裏門を出づれば突たる神樂岩あり天然巖にして其形狀恰も獅子に似たるより神樂岩と命名せしものならん眺望快濶脚下は波浪白雪を飛ばし夏尚寒き感あり。古昔日蓮上人旭を拜せし處に小湊誕生寺と相對す前面渺茫涯なき蒼海は則ち太平洋にして遠く亞米利加洲に達す偉人の修養地たる間はずして知るべきなり下れば頼朝公隠窟あり間口三間奥行七間の天然洞窟にして治承四年石橋山より遁れ來りて修養せし處なり福女稲荷を祀る毎年初午には善男善女の參拜する者千を以て數ふ社前の馬踏石は木村太夫畷海岸に在りて昔同所に名馬を産し太主驪と名付け頼朝公の愛馬となり偶〻石に其蹄痕を止めしものなりと傳ふ其上高所の一角は維新前黒船渡來の當時島主砲臺を築き藩に提供し時の警護に充てたる所にして幼稚なる砲門の今尚ほ存在するも笑止なり。

歸路復た表門を出て石段の中腹より右折西端に至らんとせば其途中に碑あり。

海暮れて鴨の聲ほのかに白し　　はせを

其又先に蓬島弊財天の祠あり鼓に山階宮藤麿王殿下御手植の松あり此祠八月十五日の例祭には附近の漁夫來りて大漁を祈願す。

西端より瞰下すれば龜石と云ふ奇岩を見るべし匍匐擡頭の狀恰も大龜の如く天然の奇又一顧の値あり此の處南は安房南端白濱より東は上總勝浦を見渡し遠近壯大なる眺望島中第一とす。

歩を海岸に運べば屏風岩に波除不動尊を見るべく又岩石を堀鑿して造りたる數個の活洲あり鮑、螺蠟の附着するあり伊勢蝦の偕老同穴も面白く餌を授與すれば鯛、鰍の潑溂として跳るあり人をして思はず賞嘆の聲を

擧げしむ從來漁村の常として一朝不漁に遭遇すれば假令高價を拂ふも一尾の魚をだに求むること能はず世人天災に歸し留意せざりしが先代等深く之を遺憾とし斯る不時に備へんが爲め頻りに講究し多年苦心の結果漸く理想的のものを案出するに至れり故に今は如何なる不漁の場合と雖も本島に到れば鯛、黑鯛、鮑、いせゑび、さゞえ等を蓄養しありて需むるものを得らるべし。

遊樂 游泳、垂釣、潮干狩　順覽を終りて隨意に悠遊せんとせば港内水清く砂細かにして婦女子の游泳に適し又釣を垂るれば黑鯛、鰯を獲べく小舟を屈ふて港外に出れば數十尾の鰶、鯖を釣り獲ること容易なり夜汐に乘じて網を投ずれば一網數百尾を漁すること珍とせず殊に干潮には兒女相携へ珍介奇魚を漁る事最も容易にして無上の娯樂なり。

更に都人の想ひ及ばざるものは春季鰹群が鯨、鮪等に追はれ波浪と共に岸に打上げられ磯邊一面銀世界と化し老幼競ふて之を拾取するの奇觀を呈することなり。

小舟を屈ふて島を一周し又は海路小湊誕生寺に到らんとせば寒來鳥、海鹿島などを眺め壯快なる舟遊にして陸路の風景と趣を異にし特種の興味を試みらるべし。

歳の丑午に當るときは安房國三十四個所の觀世音大開帳を行ふ丑年に行ふを本開帳と云ひ午年に行ふを中開帳と云ふ近縣の善男善女相誘ふて安房巡遊を企て名所古跡を訪ふもの沿道絡るが如し之れを稱して巡禮者と云ひ此年を巡禮年と云ふ本島に來遊するもの常に絶えず雖も特に此巡禮年に於て最も多く日々數百人を數へ或は一千人に及ぶことあり其多くは農民にして日常田園生活にのみ親しむを以て一度此廣濶壯大なる海濱の風光に接せば賞嘆を禁じ得ざるも亦故なきにあらざるなり。

大正元年石川寅治氏此地の風光を描寫し東京博覽會に出陳して江湖の喝采を博せしより畫家の來島寫生するもの夥し蓋し其材料の豊富にして他に見るべからざるものあるが爲めならん。

春より秋にかけ島内に飲食店の設あり新鮮なる魚介を調理し天然の風光を擅にし一盞を傾け陶然醉郷に入れば全く蓬宮仙郷に在るが如く終日倦まず歸るを忘る神心清爽にして其快言ふべからず一たび杖を曳ける士の賞讃に據りて知るべきなり。

産物 みやげ品　島の附近は鮑を第一とし鰹、秋刀魚、鯛、鰍、鮪、鰹、鰺の魚族及び蝦、海老、鹿尾菜、若布、海苔等豊富にして冬は鮪の漁獲多く夏は鮑、鰹の産出盛なり。陽春三四月の候鰹魚の大群附近に寄せ來り一獲千金の漁事あり七八月には二三里を距てたる洋上に鯨の群を射撃する勇敢なる獵あり、「みやげ」として鮑、螺蠟の罐詰、鮑鹽辛、鰹節、鰺、鯖の干物、鹿尾菜、若布、蓬羊羹等あり又遊覽記念の繪ハガキあり需に應じてスタンプを押捺す、鮑、さゞえ、海老の如きは活きたるものを持歸ることを得べし。

勝景　東は渺茫たる太平洋に面し西は疊々たる岡嶺を眺め秋晴寸雲なきの日に當ては遙かに伊豆諸島を煙波の間に望むべく北は鴨川、天津、小湊の沿岸一帶の翠巒蜿蜒として勝浦岬に連り鬱蒼たる清澄山は其の間に峙立し碧天を摩し山光海色を一眸の中に收めたり冬暖かに夏涼しく紅塵到らざる仙郷にして春風歌ふべく秋月吟すべし若し夫れ天候一變せんか怒濤忽ち天を拍て餘勢斷岸を嚙み銀山前に崩れ雪嶺後に湧くの壯景を呈す仁右衛門島は實に氣象萬千天下の奇觀を悉く鍾め得たりと云ふも敢て虛誇の言にあらざるなり。

仁右衛門島に關する古今の詩歌

物部鳴岳碑文に曰く

今問島名平野氏曰人未有名之爲余擇焉余曰名之難矣名不正則言不順請以蓬島卽取諸蓬萊之義也天下之詞人至此者抽漢寄懷賦此勝豈可謾安期之藥哉。

太政官日誌に今上の大嘗祭を行ふ安房風俗歌二首を奏す其一に曰く

名細き蓬が島は君か世の長狹縣の神やつくりし（神祇大錄飯田年平所詠也）　梁川星巖

浪太　赤壁萬丈、漁人往々擊山腹架屋以居焉、其嵩石亂立波濤中者、奇怪百出、殆不可名狀、

雲咿日脚挂危礁風捲天心落怒濤人與鼉鼉爭窟宅山疑虎豹脫皮毛自非造化工夫妙安得削成如許高可笑衰翁不量力欲持寸管闘才豪　蓬島

赤立巖嵩萬笏明衝崖風浪怒雷聲恍然夢到蓬萊島撒手金鰲背上行　同

又

六百年來食此州素封豈復版圖收漁租千億治生足眞個人間萬戶侯　宮澤竹堂

又

峻峰圍洞口路轉一村開家與魚龍住人浸潮汐來怪巖疑虎豹絶島卽蓬萊唯見童男女徐生安在哉　大槻盤溪

舉杯欲問天心月遊興坡翁趣奈何一葦任流豈無意恐他輕棹碎金波　恩田城山

遊蓬島

童男童女載將來采藥樓船難復回徐福當年尋不得太平洋上有蓬萊　石齋匡

仁右衛門島

潮洗東瀛日島留右將蹤一竿月堪釣萬頃海爲封朔府委荒草蓬洲看茂松百川之所注景勝亦朝宗　谷村映雪

又

仁右衛門之島古主人吾友豈遂名春風三月花同笑鷗也不猜波不驚　林天僖

波太島

一島蹤然跨巨瀛四圍縹緲是波濤蓍魚但待不時用輸到都門價太高　松原瑜洲

偶成

扁舟爲路水爲垣孤島生涯絶世喧誰識一竿風月外有朋時到自都門　島主順天

源講修

志長島安房の浪太の海中に平野の氏か石上ふるき美世より家居せる島のその名は久瑳島と四方に聞えてあしたには潮の八百會ゆさし昇る日影先照ゆふへには常世の波を分出る月そかゝよふ只向ふ南の海は名に負る洲の崎聳えその遠に伊豆の大島しら雲の中にほの見ゆ日むかしに棧路下れは細石のなれる巖のまほらかに宇賀のみたまの鎭りて齋垣の前はあやしかる小島數々蘆垣の間近く並ひ澳みれは大江戸さして大舟の行かふ中に加豆乎釣小舟も交り眞帆かた帆連なるさまそたくひなき西邊の岡は雲部濤南の神の御蔓かみさひて木の間に立り廣前に立て臨めは鰯ひき鯵釣舟の數しらに浪に群り海鹿島つとふあしかの立居さへ近く見え津々浦々の磯の崎々こちこちに波にうかひて上つふさの桂の崎遠著ろく見えこそ渡れ漸近き潮干のかたにおり立は百千の貝の其中に玉もましれり美さかなは何か求めむあさり得し鮑さたをを採よろへ有磯の上に思ふとち圓居をなしてしかはかり備はる四方の山水をあかすめてつゝ盃の數めくらして則に老す死すのやま人の樂とゝに有けりとおもへはうへも此島の負る名こそはむかしかり氣禮

反歌

いつの世にひらき初けむ仙人のすみかにならふこれの蓬島

師走海に舟を泛へて　齊部宿禰義鑑

海暮れて鴨の聲ほのかに白し　はせを

蓬島

吾國の小島ひとつとおもひしにきゝしにまさる蓬島哉　綠珠尼

蓬島の平野氏をとふらひて

千萬とかきりしられぬ此しまにうら山しくもすめる君かな　佛外

蓬島

浪風の音に聞へしこの宿はたつの宮ともおもわるゝかな　瀧川愚佛

蓬萊や春眠を惹く伽羅枕　俗謠

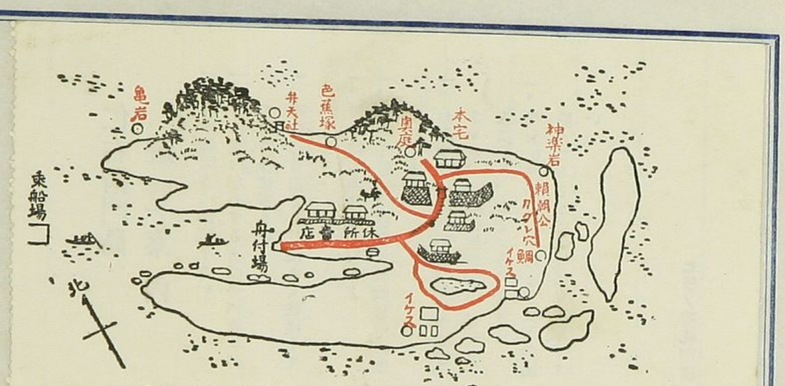
厳で固めた浪太の島は根から生へたか浮島か

正月繻搗謠

老爺かこだせ北の灣が寄りだ今朝も雙船又三艘オメデタヤアヨヤサアヨヤサア

（備考）老爺は陸に居て漁事雜役を掌る者なり寄りとは鰹群の寄せ來りたることを云ふ。（以下省略）

島案内所發行



（朱字は見る處で朱線は通路です）

いつの世にひらき初けむ仙人のすみかにならふこれの蓬島
　　師走海に舟を泛へて　　はせを

海暮れて鴨の聲ほのかに白し　　齊部宿禰義鑑

吾國の小島ひとつとおもひしにきゝしにまさる蓬島哉
　　蓬島の平野氏をとふらひて　　綠珠尼

千萬とかきりしられぬ此しまにうら山しくもすめる君かな
　　蓬　島　　佛外

浪風の音に聞へしこの宿はたつの宮ともおもわるゝかな
　　波太島

蓬萊や春眠を惹く伽羅枕　　滝川愚佛

　　俗謠

巖で固めた浪太の島は根から生へたか浮島か

　　正月繻搗謠

老爺（ろうや）かごだせ北の灣が寄りだ今朝も雙船（もろぶね）又三艘オメデタヤアヨヤサアヨヤサア

（備考）老爺（ろうや）は陸に居て漁事雜役を掌る者なり寄（よ）りとは鰮群の寄せ來りたることを云ふ。

（以下省略）

島案内所發行

の日曜と天長節の休日が二日つゞいて出張部び遠足会を催し、其の団体に加へて、外房物一面をすることゝなつた。自分の千葉行は、旅行し此ことは、去田東五が銚子に及し此ぞ二回銚子と行つたことがある。四年前小電車と乗合と外房物けれども、今の今度のは記憶する所なるよりい、高時は鉄道の便が全く無く、房州旅行は勿論の騎馬であつた。今は鉄路は房州の海岸を圍繞する外に或る多の内部の線路あつて、四十年前の交通の開けたことは驚くべきものである。さて二日は海を

外房物の海岸は、海を伝ふて行くし此。常に往此ことのない多くの地を此に住し、毎日の眺を楽しく此の赤しい風景は、平凡である。唯此房物海岸の一部得微も見るべきは、沿岸の岩石が異色のことく青々平々たる連なりをなす所が多く、実に突起島嶼をなしてゐる所もあるけれども、実に割合に少なくて、浪太時の如きは、海の荒い人家の一番大きく、古来もこゝに一人家がある。つて、陸に甚だ近いけれども、後つて見ると一種の風致がある。概して青の岩快石の点が、きわめて少なく、寧ろ千畳敷とも名くべ

き出でる遠の山岸に接して多くあるのが却つて言
を感ぜしむる。廣田の史蹟のほんとうの日蓮
の因縁の地を弔ひ一二推さねばならぬ。日
蓮の生れた誕生寺、日蓮の首人だ法華寺
日蓮の法難第二回の地東條の小松原などは
探討すべきものの感ある。恰度日蓮像を寄
出した前の田中翁が日蓮像を懷ろにして車中より後を
もたれて行くなど所謂いろいろの地の軌跡が北方で
説明されるものもあるが、往年の教徒
を訪ねて風景の奥味を感じたとも
とのお保木更津などは要地とされたが今

鴨川と京地が殷賑の京となり、海岸ここに輻
輳し、追々繁盛の徴が見へる。ここは海と渡し
てゐて、海景もよろしい、旅客は不自由なく
ら旅客は不自由なく、船も和南のものがあつか
地で、何故か過ぎるが出る。自分は工業とする日蓮
初分の法難の地東條の小松原を見たいと思つ
てゐた。鴨川から極めて近かつたから自動車
を雇つて訪問した。ここは日蓮が天津の豪
族工藤吉隆の招待に応じて法華経を外教
人と共へて行く途中、小松原で日蓮を合戦の
敵として嫉視する東條景信の一族数十を
受け死に瀕した法難の地である北時敵又と

鬱々たる法華経寺の境内が、同じ谷の
鏡忍寺にもある。高台なる境内が広く、遠望も
広々として、殊に高台なるが故に、老樹蒼々
として幾百年を経たるかと思はるる大
槇は天を striking して枝葉の四方に垂れたる
状は境内に風格を添へ、低徊去るに能はざ
らしめたり。法華経寺は雑沓の
為とは異なれども、ここは殺
伐たる記念物が行はれ、殺伐の気の来たり
ユニークなるが打死したりと悲惨のことを起ひ起
して悲感はなんからんと思つたりされば
懐古に堪へざるなり。誕生寺は近ごろ開化し

あるが、此の鏡忍寺かまさに開化を見かねて
みるのを見て愉快を覚えたり。清澄寺は時分
の都合で往訪を見合はしたが、ここから日蓮の五
年の間義道房なるものの奥を見えたのは、如何の海の
勇ましいこと、寧ろ仏とつるといふ島
ばかりなり。勇の浦へ往年十四東洋と日海
の時は実に勇の勇かな祥を
説刺船の舷側を[illegible]
なりの如く押寄せ
甚だ主の観を呈し以て今なほ
羅を見せず、僅かに二三をあやつる人と言の
が立て船をしきりに一向無を（狂奔する）

見へてゐるとは。さうの列風と魚を畜らしむ上に此
今觀客の集まるこゝの飲うまうく、鯛も愛想
をつかしらるらし。浪大陸いちゝく住する平
吹仁右エ門の名を伝へつゝ沖はんてみる大海波岸
に突出の島で陸から岩場くも行けそうな
短距離のあるが、事柳沖矢張り船で渡
すのゝ仁右エ門が収入を図る為めであらう。
陸から人家の見へるのも一つの風致である。時
とゝあるを実に岩石の大なるものである。いつの
頃から長こ人が住つとかハてうるさいが頼朝
が此島に隠れたとゝ伝説もあるとえを助
けたのが今の仁右エ門の家だといふそのみるけ

そゝえいらるゝ。さうかしつうの家こゝ
い面目がある元禄の海嘯こ男あて家が破損
しとゝあるい或いは寺でもあらうか、建築の
用のてある材木の西ゝえ元禄の造材であるか
ル見へるこゝがある。海嘯を防く為めが高
く築いた石垣が家を囲んでいるから城郭
を見るの故かある。家も庭も新市の富家
家の故かあるう。島中の怪岩老樹の八
ゝ、今時金満家が別荘地としても選
ばれるのであらう。えんな時も家も他の高
豪の手を極るのハあるまいかと思ひなれ。時中
華を産し菓子を産し、詩人八

蓬莱と因み北島を蓬島と呼び いろいろの話が
有りしとある。北部の海 各一日平人を数ふと云
へ、往復二十隻の船債の可なりの収入なり、平田
が孤独 舊生活を維持する所以か、北行博
る所云と多かるべし、新下と国体論 行をなし、
階級を金銭 没却して互ひに相 親しみなる
ハ北行の高き倫理と云ふべき也 四月廿五日記

書畫骨董雜誌　第二百五十一號　昭和四年五月一日發行

岡田半江を環りて山陽と竹田

木崎好尚

一

『山陽詩鈔』の壬午集(文政五年)に、岡田半江へ贈つた二首の詩がある。

第一首

「相逢毎歎素心違。不待抽簪覺昨非。
君是閑雲我野鶴。從今相伴自如飛。」

第二首

「偕隱無如宿志違。廿年同夢是耶非。
出樊老鶴憐孤影。恨不江湖對々飛。」

この詩題には「半江生の解官を賀す」とあり、それに又注を加へて、「半江、ささに偶(絲桐女史)を喪へり、故に(句中この事に)及ぶ」とある。

この詩を一口に言うてみれば、

「お互ひに閑雲野鶴の放浪生活を心掛けてゐるに、君は今まで仕官の身であつたが、今度その職を去つたのだから、これからは素心の通り、大手を振つて青空を飛びまはることが出來る。」

「ところで役人生活の永い間、放浪の樂みを妻と共に味はふことも出來ず、廿年同夢の奥樣は亡くなられたのだから、今や夫婦手を携へて自由に遊びまはることの出來ないのは、さても殘り惜しいことだ。」

ことし文政五年九月一日、山陽(四十三歳)は半江(四十一歳)へ、この詩を添へ、伊勢津藩の祿を辭して隱退したのを賀する手紙を送り、

「疊韵對々飛(第二首)と云方は、代レ君憶二亡令聞一之意にハ……まシに出來ハ積也。」

第二首の追悼の詩は君の身になつて亡き奥様を憶ふ心持であるが、割合手際よく出來た積りだと書添へてゐる。

九月一日の手紙に先だち、山陽は又、八月廿九日にも、錫製の地爐利(酒器)に添へて手紙を送つたが、この酒器は、半江が近く繼室を迎へるに就き、その祝言の席に用ゐらるべく心をこめた贈り物であつた。

この詩は、小石樫園(元瑞—卅九歳)へも示されたと見え、その次韻がある。

「岡田半江(自注—自二父米山人時一仕二津藩一)退隱。山陽外史有レ詩。賡レ韻同レ之。

樊鶴常嗟二野性違一。放歸何說二昨來非一。
攝水京山兩清絕。飄然欲下向二那邊一飛上。」

樫園もその友人半江の退隱を、山陽と共によろこび、「同レ之」といふは、同じくこれを賀する意味である。山陽は、この詩を評して、妙々。原韻失レ色。と言うてゐる。

二

光陰、矢よりも早く、それから數へて九年目—天保元年の十一月三日、山陽(五十一歳)は、この昔語りを憶ひ出で、又一通の手紙を送つた。半江(四十九歳)の先妻には、忘れ形見の男の兒があつたが、早や十一二歳にもなつたであらう、それが今繼母の手に成人して、もしや世間に有る習ひの繼子育ちで、家庭に何事か風波が起つてゐはせぬか、とも思うたらしく、即ち手紙の全文を見ると、情味いと深く、讀むも涙のこぼるゝやうにしたゝめられてゐる。

「其後御遠々敷ハ」

この「遠々敷」といふのは、無論文政五年以來、遠々しいのではなく、親友の間柄とて、九年間も文通しなかつたといふわけではあるまい。

「寒冱之節、御無レ恙之狀は、丹游二而今知、御羨しく存ハ。」

このころ、半江は伊丹方面へでも遊歷したのであらう。

「此掛軸、僕十年來之思付二而、此節仕ハ。大體御忘れ被成ハ時節なるべし。所を忘れさせぬ心也。」

「此掛軸」は即ち半江の亡妻絲桐女史遺墨の蘭の畫を、一幅に仕立てゝ所持してゐたが、この手紙に添へて、岡田家へ改めて進呈すべく、今二首の題詩を書き加へたといふのである。その詩は、右の第二首の追悼の詩と、新たに一首、

「哺レ乳裁レ衣亂二髻雲一。偷レ閒舐レ墨却芳氛。
幽蘭花落無二消息一。猶有二香痕留二與君一。」

(前の奥様は、おさな兒をかゝえて、乳をのませ、針仕事には忙しく、髮の手入れにも間の缺げる身で、畫筆を執られたが、その蘭は、花すでに落ちて消息は絶えたが、餘香は、この通り今にのこされてゐる。)

それを、十年を經た今日、「忘れさせぬ心」で、改めて君に進呈する。

「只今の御令政様にも御示し、是を先室の木牌同樣に、御大切に可レ被レ成と、乍レ憚久太郎申ハ段、御傳可レ被レ下ハ。」

この一幅を今の奥様にも見せ、位牌同樣に大切にしていたゞきたい。

「令息は勿論の事。併徒憶二先母一、而不レ念二今母養育之恩一、育の恩を念はぬ」やうにてはいけないと、よく〳〵お諭しかたのむ。

「今年は幾つにハ哉、十一二に御成ハ哉、十[illegible]暖い申ハ。大切に御教育可レ被レ成ハ。」

あの時は、まだほんの乳呑み兒であつたが、もはや十一二になられたであらう、こゝの道理は定めて合點のゆく年頃であらうから、「大切に御教育」なさるべし。

「此方豚兒八歳、母やかみ讀書ハへ共、天性豚犬にハ。」

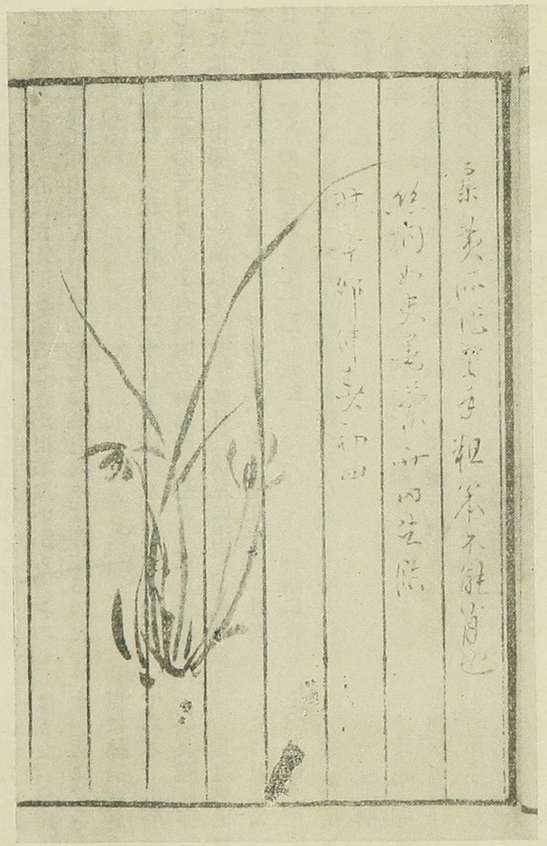
こちらの又二郎(後の支峰)は、ことし八つになる、母(梨影女史)が教育をやかましく言うても、一向つまらぬ生れ付で困つてゐる。

「此節、山荆又々分娩、産出一女、徒呱々聒二人耳一耳、氣色あしくハ。草々。」

と筆を留め、ことし天保元年十一月一日に生れた長女陽子の事を報じ、男の兒などはよけれど、たゞ泣き聲がやかましくて、氣色がわるいと、半江(四十九歳)宛に、この手紙を送つてゐる。

三

山陽は、元來、「情」の人である。而も世間では、やゝもすれば「傲慢無情」にして人を人とも思はぬやうな氣質だと言はれて來た、それは以ての外の間違ひで、誤解も是に至つて



山陽が詩を題して、岡田家へ贈れる半江の先配絲桐女史遺墨を、竹田が臨摹して題語を加へたるもの(天保二年二月四日、五十五歳の筆)
(竹田手書の文集餘白所錄、岡本豐洲氏藏)

則更不可。是又僕申ハ(と)御仰諭可レ被レ申ハ。

奥様と同時に御子息へも示して、生みの親を忘れないやうにせられたい。けれども「徒らに先母を憶ふて、今の母の養

は、全く正反對の觀察であつた。

この事に就ては、田能村竹田が何よりも雄辯に、その事を物語つてゐる。かの「一樂帖」の跋の中にも、

「世に子成を目して倨傲無禮とするも、然らざるなり。子成は物を待つこと極めて厚し、但、毎人の爲す所、未だ精到ならず、その心を饜飽しむるに足らざるのみ。」

と言ひ、世間の人々の爲す所が、とかく齒がゆく思はれて、彼れ自身の心にたんのうすることが出來ないから、そのそぶりを見て、山陽を高どまりしてゐると人々は評するのだと解してゐる。

その竹田は、天保元年の大三十日を山陽の水西草堂に越年して、翌二年の元日に、小石樫園の用拙居へ還り、正月十八日には、又山陽宅に一泊して、翌十九日、伏見に出で、夜舟で二十日に、大阪に着したのであるが、その滯在中、二月四日の夜、半江の宅を訪うて一泊した時、いろ〳〵の物語に夜をふかしつゝ、席上、六言の詩十首を作つてゐる。その中の一首に、

「卅年交深情熱。乃知内外無嫌。
春寒喚婦篝火。相久教兒下簾。」

三十年來のふるい交際で、何の隔て心もなく、半江の妻も子供も、そこへ來て、妻は火を入れ、子どもは障子をゞめて、(支那風にいへば、簾を下して)まだ肌寒いきさらぎの夜風を防いでくれる、全く我が家に歸つたやうな心持であつた。

竹田と岡田家とは、實に米山人以來の舊誼が深い。彼が上方に遊學の昔、米山人の恩顧を受けて、我が畫の衣鉢をつぐものとして引立てられたのを始め、半江との間柄は兄弟同樣であつた。半江を環りて竹田と山陽とは、同じ情誼の厚きを持ち、持たれてゐる。去年の十一月三日、山陽より半江へ送つた右の熱情こもれる手紙は、この席上に取り出されて、それを竹田が一讀したのである。讀み了つて彼は、いつもの眞情に滿ちた山陽の心入れを、吾が事のやうに、しみ〴〵と味はうた。早速行李の中から、自身自書の「文稿」一冊を抽き出すと共に、その餘白へ、山陽の手紙を丹念に寫し留めつゝ、更に絲桐女史の遺墨に題した山陽の詩二首をも寫し添へたのである。山陽の題詩には、尙識語さへ記されてゐる。

『余篋底弃絲桐女子畫蘭十年矣。今以付半江題。竢其遺兒更長示之。莫忘舊德也。　友人　襄』

この識語さへも、竹田は一字も漏らさず、これを寫した上、更に〳〵、「文稿」の餘白へ、女史の蘭を臨摹して、

「柔荑所作。老手粗笨。不能肖也。
絲桐女史墨蘭。竹田生臨。
時辛卯仲春初四。」

と題語を着けてゐる。

竹田ことし五十五歳、彼の作畫は今や老大家たるを示して餘りある。その腕で、素人くさい女史の蘭を臨摹したのであつた。その畫蹟を見ると、これが竹田の筆かと怪まれる程である。同時に、そこが臨摹の妙なる所以と見るべきであらう。それを老人の粗笨な手では、とても女手のやさしさは似せることが出來ないと言うたのは、さても味はひ切れぬゆかしの情況とを深く思ひやりつゝ、心中別樣の感懷を寓した暖い詩情は、いつも此の通りであつた。それを半江の場合と同じく、心の底から味得したのは、又、同じ情熱の人たる竹田以外には求め難いであらう。(元)

【附言】前號拙稿「賴山陽の書翰」末尾、「食華膏魚歌」を、「山陽遺稿」に逸したるやうに記せしは誤りにつき、ここに追訂す。

身の手紙を寫してまで、己が半江に對する心の底を見て呉れたかとは、當の山陽本人して、恐らく知らずにゐたであらう。絲桐女史の靈にして、山陽と竹田とから寄せられた、深い深いこの心持を知らしめたなら、彼女は黃泉の下、如何に厚くそれを汲み取つたであらう。それを目のあたりに見てゐる半江の感懷は、又更に如何に深かりしかを思へば、この一くだりの物語は、まさに藝苑の一佳話として永く傳へらるべきであらう。

四

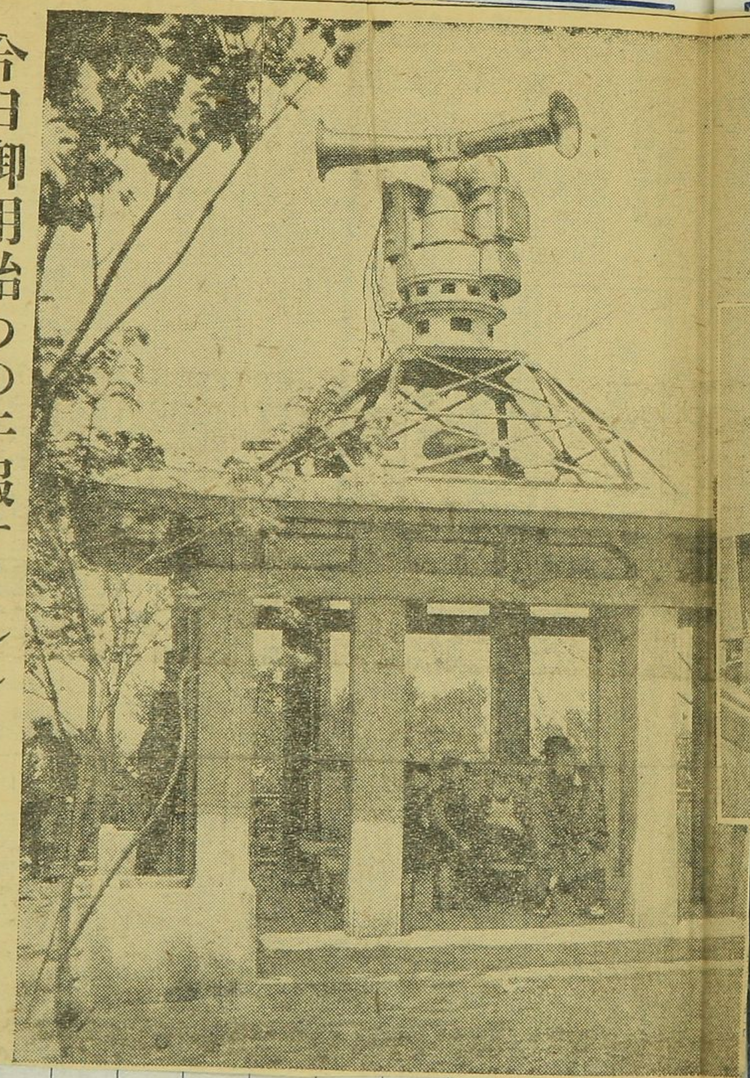
尙これに關聯して、書き加へて置きたいのは、ことし天保二年、竹田の一子如仙(太一、廿四歳)が、醫術修行の爲、京都(小石樫園の塾)に遊學中、竹田は、大阪より歸鄕の後、かの傑作「設色梅花隻鶴圖」(大阪、松本雙軒氏藏)を作り、それを如仙の手元へ送つて、山陽の題賛を求めしめた。それが年を越えて、京都から送り返されたのを見ると、山陽は

「老楳蟠鬱亞疎枝。鳴鶴在陰雄與雌。
應望孤雛游未返。湖雲春水影迷離。」

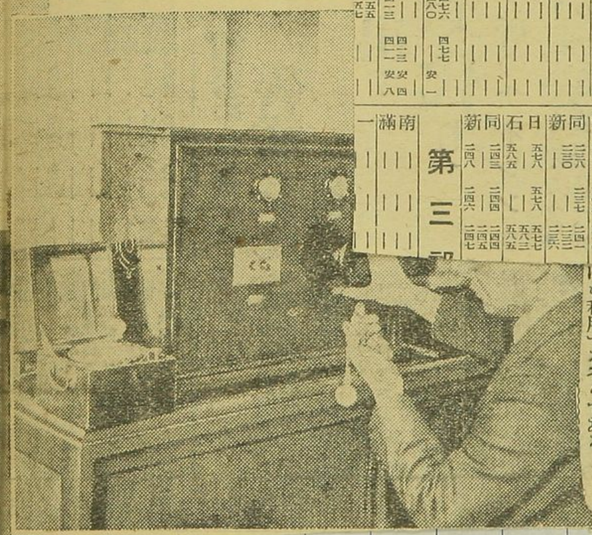
といふ一首を題(天保三年二月)してゐる。雄雌一つがひの鶴を竹田夫妻(妻さだ)にたとへ、孤雛の如仙が今游學中の身を思ひやりつゝ、鳴いてその歸るのを待つてゐる、と眞情の籠つた言葉のあやを見て、竹田は涙をうかべつゝ、「子成、天倫に厚し、語を下すこと必ず著實なり」と、自から題語を添へた中に書いてゐる。この幅には、外に雲華と角田九華の賛もあるが、いづれも單に梅や鶴の事だけを咏じた月並調たる

今日御用始めの午報サイレン

之れに通電する市社會教育課内の報知機



ンに續いてゐる、先づ正午三分前に天文臺から社會教育課内に設けられた操縦室に合圖がある、と係員がこゝへ飛び込んで正午一分前にスキッチを入れると、電流は中央電信局を經て三ケ所のサイレンは同時にブーと鳴り出す、かうして一分間高低もなく響いて丁度正午になつた時今度は天文臺でスキッチを切ると電氣によつて自動的に各サイレンの電流が切れ、音



である、若し之れ等の人々が脱退すれば日活の時代劇は全滅すると迄悲觀する向もある、第二は内容が依然改善されてゐない、藤田謙次郎氏時代の缺陥も相當あり、藤田氏退社後も同氏に少なからぬ金を出して居る、從つて金融狀態も決して樂ではなく漸次逼迫を來しつゝある一面に於いて、本建築を行はねばならない關係上大いに困難

京都、名古屋、仙臺、熊谷、久留米、下關、松江、鳥取、姫路、宇和島、大津、和歌山、宇治山田、福井、上田、桐生、八王子、千葉、山形、弘前、宝塚、釧路等では已にやつてゐる、此モーターサイレンは今後何か事變のあつた際や市民に急を知らせる時又は軍事方面では夜中敵機の空中襲撃等にも利用するそうである

サイレン
左こね

今日から鳴り出す ドンのお代り

市内三ケ所のサイレン

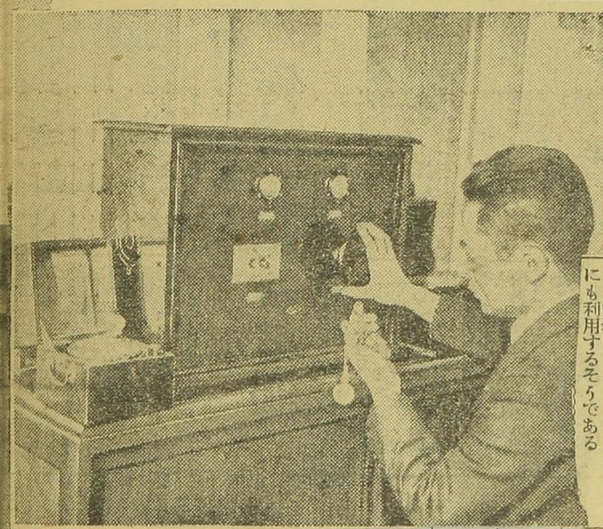
ドンの代りに市民に正午を知らせる市内三ケ所のサイレンは廿七日の試驗によつて、まづ大丈夫といふ折紙をつけられたが、市社會教育課では更に万全を期するため卅日午前十一時十分、正午、午後一時の三回に亘つて最後の試驗を行ひ、いよ〳〵今一日からドンの代りに正午を報ずることゝなつた、たゞ動力の關係から五月第一、第三の兩日曜日だけは休まなければならないが、六月からはこの設備も出來るのでその心配がなくなるなほ丸の内付近は高層建築が櫛比してゐるためよく聞えないとが判り特に丸の内付近に更に一ケ所新設することになつた

鳴り止んだ時 丁度正午です

半徑三十五町の圓内に響く

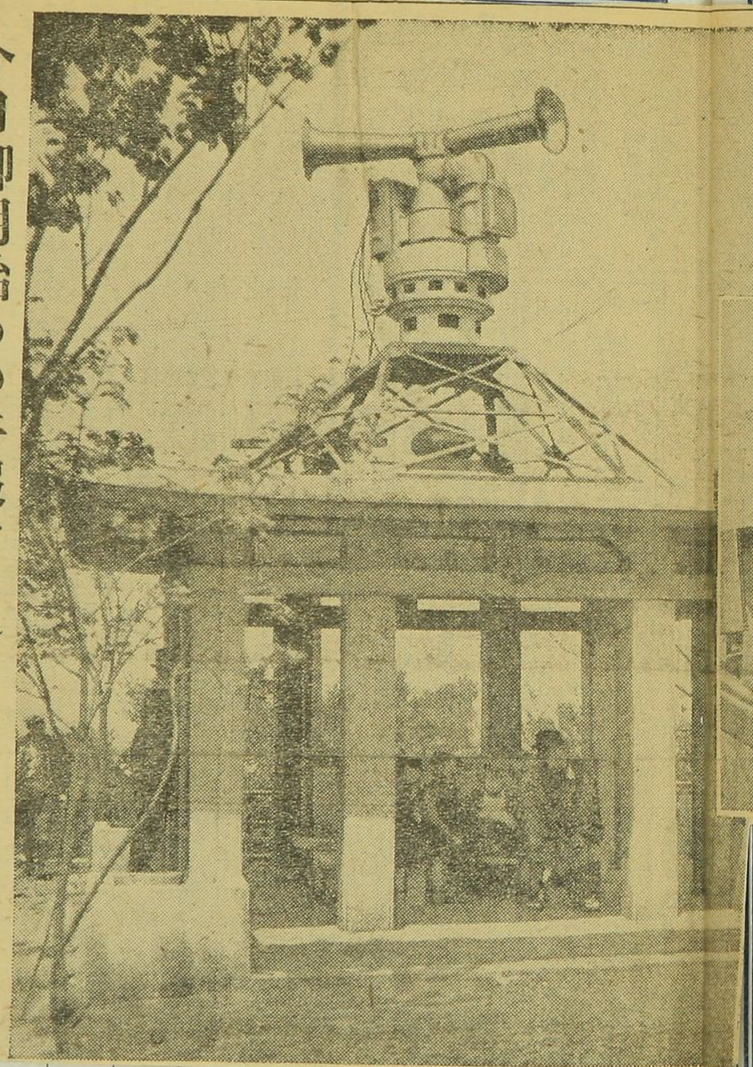
モーターサイレンの話

ドンに取つて代つたサイレンは加藤式KSQモーター、サイレンでドンが一發十九圓七十錢を要したのにこのサイレンは三ケ所でその電力十馬力、二百ボルトで一日わづか四圓八十錢の割に當る、先づ經濟的である、凡そ百二十度の角度を持つた三つのラッパで半徑三十五町の圓内に響く、このサイレンの電流は市外三鷹村の天文臺と中央電信局と芝公園内の市社會教育課と、それから三ケ所のサイレンに續いてゐる、先づ正午三分前に天文臺から社會教育課内に設けられた操縱室に合圖がある、と係員がこゝへ飛び込んで正午一分前にスヰッチを入れると、電流は中央電信局を經て三ケ所のサイレンは同時にブーと鳴り出す、かうして一分間高低もなく響いて丁度正午になつた時今度は天文臺でスヰッチを切ると總電氣によつて自動的に各サイレンの電流が切れ、音はぴたりと鳴り止む——この止んだ瞬間が正午である、モーターサイレンも東京でこそ新らしいが京都、名古屋、仙臺、熊ヶ、久留米、下關、松江、鳥取、姫路、宇和島、大津、和歌山、宇治山田、福井、上田、桐生、八王子、千葉、山形、弘前、室蘭、釧路等では已にやつてゐる、此モーターサイレンは今後何か事變のあつた際や市民に急を知らせる時又は軍事方面では夜中敵機の空中襲撃等にも利用するそうである



今日御用始めの午報サイレン

之れに通電する市社會教育課内の報知機——その一つ愛宕山の分——と



サイレン
左こね

願海編輯
爲恭挿畫

佛頂尊勝陀羅尼明驗錄

藏版　洛西栂尾　高山寺
發行部數　百部
用紙　土佐生漉美濃判
體裁　大和綴帙入全三冊
正價　金拾八圓（送料不要）

京都市寺町通姉小路上
發賣所　竹苞樓　佐々木惣四郎
電話上(3)二九九九番
振替大阪二三五二五番

刊行趣旨

洛陽　猪熊信男謹誌

近代刊行の書籍汗牛充棟も啻ならず、然れども其の特に異彩を放てるものを佛頂尊勝陀羅尼明驗錄とす抑も何が故ぞ、是れ此書が幕末に於ける台宗の大德願海阿闍梨の名著たるのみならず、大和繪復興の巨匠岡田爲恭が靈筆に成れる數多の挿畫を以つてし、又古典籍研究の大家と聞こたる魚山の學僧宗淵法印が苦心の裝幀を試みたれば也、若し夫れ高雄神護寺の鐘を前の三絶とせんか、此の書を又後の三絶と稱す、何の不可かあらん、

佛頂尊勝陀羅尼の功德は一切の罪障を消滅し、壽命を延べ、福裕を增すに在り、而して願海阿闍梨は夙に其の篤信者として聞ゆ、茲を以て阿闍梨、叡岳回峯の大行中に於ても之を施す事、無慮數萬人、大行滿じて後、道譽九重に達するや、天闕に上つて玉體を加持し奉れり、尋いで皇儲祐宮御不例の事あるや、選ばれて尊勝の秘法を廣福王府に修し、忽ちにして靈驗を顯せり、此時爲恭秘法の本尊を描けり、而して更に尊勝の加被力を大衆の前に現ぜんとして結緣の碑を北野に建つるや、爲恭又畫圖を試みたり、由來願海は爲恭を古今獨歩の畫才として愛し、爲恭は願海を當代第一の德者として敬し、兩者の心交はさながら莫逆の如く、願海の一擧手毎に、爲恭は一投足して隨へり、此故に尊勝陀羅尼明驗錄が願海多年の心血によつて成らんとするや、爲恭特意の筆を之に下す事、固より其の處たり、而かも爲恭は應援尙ほ足らずと思惟してか、卷頭に行成卿の書を集寫し、卷尾に王法佛法の說を縷述して、師父に對する思慕の情を具に表せり、今にして顧ふに、不幸、中道にして身を鋒鏑に委し、毀譽褒貶區々たりと雖も、彼が心事を忖度せんか、苟も班を侍中の所衆に列し、有職故實の研究には更に甚深の朝恩を擔へり、況んや師事の人に心醉して修法の本尊を謹寫し、王法佛法を說くをや、爲恭たるもの那んぞ異圖を禁廷に逞うせん、只末節細行を顧みず、行藏云爲を縱にせし自然の徑路を憐まんとす、

尊勝陀羅尼明驗錄編輯の擧、一たび世に洩るゝや、雲上の貴紳、巷間の緇素、孰れも隨喜して資を投じ、東坊城聰長卿、慈本僧都、宗淵法印等の知己は、各序跋を寄せぬ、而して宗淵法印親しく製本を監して、帙の上に自ら題書を揮毫せり、斯くて安政元年五月の交、之を發兌して世に其の眞價を問ひしに、人々驚喜して爭ひ求め、忽ちにして坊間の書店に其の影を沒せり、其の時既に然り、後世年序を經るに從ひ、次第に又其の所在を失し、現時存するもの更に寥々乎たるに至る、眞に惜みても餘ある事ならずや、然るに余輩數年前、願海阿闍梨の舊藏本奥書に『右以件板奉納于高山之寺石水院寶庫畢、伏願弘通遐代利益人天云々』と阿闍梨自ら識せるを見て、必ず洛西の高山寺に板木の存せん事を想ひ、直ちに寺主に搜索を乞ひしに、果して舊態の儘なりき、此時の歡喜何の時にか之れを忘れむ、斯くて竊かに他日の刊行を期せしに、時なる哉、今や高山寺開山明惠上人の七百年遠忌、二年後の昭和六年に切迫し來り、諸堂修繕の事業近く始まらんとし、又願海爲恭の行實次第に世に知られ、爲恭遺筆の展覽會、近時相續いて興らんとするに鑒み、茲に高山寺々主と相謀り、此際寺費の一端に資せんと欲し、竟に此の明驗錄の刊行を企つに至れり、

依つて此種の古典出版に最も經驗多き竹苞樓書店の主人を起たしめ、紙質、印刷、題簽、帙、紐等悉く初版本に憑依し、一に原本の面影を髣髴せん事を勗めしめぬ、唯少しく遺憾なるは、下卷の奥なる渡唐天神像等の版木數枚を闕ぐ事なり、然れども六角街の法衣商、藤源主人の特志によりて新たに此等の版木を復し、終に完備を得たり、是れ實に同氏の祖父源右衛門氏が、願海阿闍梨の爲めに製本の費を施入せし因緣を只管回想したるに依る、余輩版木發見の動機を作りたる者、茲に庸劣を顧みず、妄りに如上の趣旨書を敢へてす、願くは江湖の雅人、阿闍梨の芳志を嘉賞し、以て信受奉行、遐代に弘通し、人天を利益せられん事を。

昭和四年四月

以下
10丁
白紙

古代人形　蒐集の頁參照　西澤笛畝氏藏

閲覧室

複写禁